

ぢ、めき 鷹の餌にする雀の鳴さわぐ也。(標註)

木綿(もめん)第三は木ワタ、爰はモメン也。

傳馬(てんま)驛傳の馬也。

鯉棚(こひたな)鯉を賣る店、棚は店也。紙手(しで)紙にて造れる房也。

また上京も見ゆるや、寒  
蓋カサに盛る鳥羽の町屋の今年米  
雀を荷ふ籠のぢ、めき  
薄曇る日はじんみり霜をれて  
鉢いひならふ聲の出かぬる  
染て憂うれき木綿裕ゆのねすみ色  
撰あまされて寒き明ほの  
暗かりに薬鐘くわねの下をもやし付  
傳馬を呼る我まはり口  
いきりたる鎗一筋に狭箱  
水汲かへる 鯉棚の秋  
さわくき切籠の紙手に風吹て

(ごさひ)

肩 徑 嘯 州 碩 東 志 房 秀 肩 徑 嘯

最上(もがみ)

上茨(うはふき)以茅蓋カサ也。節せち(せち)節衣にてセツキの方言。

奉加の序にもほのかなる月  
喰物に味の付こそ嬉しけれ  
煤はくうちには次に居替る  
目をぬらす禿かぶのうそに取あけて  
戀にはかたき最上侍  
手みしかに手拭ねちて腰にさけ  
繩なはを集る寺の上うへ茨あざ  
花の頃晝の日待に節せちご着て  
さくらに狂ふ獅子の春風

(ごさひ)

州 碩 東 志 房 秀 肩 徑 嘯

田野

角大師(つのだいし)虫除の爲め、竹に挟みて立る也。元三大師の畫札也。  
鶯ふさ(はし太)山鳥也。

片足(かたし)跛になりたる下駄也。

恐る(おそる)婆心録に「おづる」と訓めり。

問の山の唄に「諸行無常の鐘の聲聞ておそる人もなし」(標註)

禪門(ぜんもん)男子の剃髮者。

嘯道や苗代時の角大師正

一七四

明れは霞む野鼠の顔珍  
鶯ふさのわやくに鳴し春の空  
かまへをかしき門口の文字  
月影に利休の家を鼻にかけ  
度く芋をもらはるる也  
虫は皆つゞれぐみ鳴やらん  
片足くの木履たつぬる  
誓文を百もたてたる別れ路に  
なみたぐみけり供の侍  
須磨はまた物不自由なる臺所  
狐の恐る弓かりにやる  
碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 同 秀 同 碩 秀

(ごさひ)

月氷る師走の空の銀河

無理に居たる膳もす、ます  
いらぬこて大脇差も打くれて  
獨ある子も矮雞に替ける  
江戸酒を花咲度に戀しかり  
あひの山彈はるの入相  
雲雀鳴里は厩糞かきちらし  
火を吹て居る禪門の祖父  
本堂はまた荒壁のはしら組  
羅綾の袂しほり給ひぬ  
齒を痛む人の姿を畫に書て  
薄雪たわむす、き瘦たり  
秀 碩 秀 碩 秀 碩 同 秀 碩 秀 碩 秀

(ごさひ)

一七五



去來(きよらい)凡兆(ぼんてう)猿鏡撰者の二人也。

雲竹(うんちく)北向氏(ほくけうし)八郎右衛門、書道を好くす。

付申されける。是か序もその心をこり魂を合せて、去來、凡兆のほしけなるにまかせて書。

元祿辛未歲五月下浣

雲竹書

(猿鏡)

鈔(いさ)琵琶湖の魚長さ一寸ばかりハゼに似たり。

沼太郎(ぬまたらう)一名(なな)さ(ひ)く(ひ)鴻(ひ)に似て眼の上(まへ)に白き條あり(逆志抄)

猿鏡集卷之一

冬

蕉	芭	其	角	那	草	秀	邦	白	良
初	あ	時	幾	錯	廣	舟	伊	な	
しく	れ	き	人	持	澤	人	勢	つ	
くれ	猿	や	か	の	や	に	の	か	
れ	も	並	時	猶	ひ	ぬ	境	し	
猿	小	ひ	雨	振	み	か	に入	や	
も	篋	か	か	た	り	れ	て	奈	
小	を	け	け	つ	し	て	乗	良	
篋	ほ	ね	ぬ	る	く	し	時	の	
を	し	た	く	し	る	る	雨	隣	
ほ	け	る	く	く	る	る	か	の	
し	け	沼	れ	れ	沼	沼	な	一	
け	也	太	か	か	郎	郎	曾	し	
也		郎	な	な	史	史	良	く	
		史	僧	僧	史	史	曾	れ	
		史	丈	丈	史	史	良	會	
		史	所	所	史	史	良	曾	
		史	正	正	史	史	良	良	
		史	秀	秀	史	史	良	良	
		史	草	草	史	史	良	良	
		史	那	那	史	史	良	良	
		史	角	角	史	史	良	良	
		史	蕉	蕉	史	史	良	良	

(一卷猿鏡)

黒木(くろぎ) 竹田(たけだ) 山城(やまぎ) 人の  
唐(たう)の歌(うた)に 馬(うま)はあれど 小幡(こぼん)の  
よりそゆく 君(きみ)をおもへ

およる(およる) 御寐(ごみ) 狂言(きやうげん) 中(なかに)  
ぼ猿(ぼる)に 行々(ぎやうぎやう) 舟(ふね)の  
て何(なに)とおよるそ

頼腫(ほうはれ) 俗(よこ)にお  
多福(たふく) 風邪(かぜ)といふ

靈照女(れいしょうにょ) しゃうぢ  
よ) 父(ちち) 麗居士(れいごし) 仕(つか)へ 禪(ぜん)  
をまなぶ 醜婦(しうぶ)也 父(ちち)に  
代(か)つて 死(し)を はか かり

簀子(すのこ)

しくるるや黒木つむ家の窓明り 几  
馬かりて竹田の里や行しくれ 大  
たまされし星の光りや小夜時雨 羽  
新田に稗殻(ひやくが)けふるしくれかな 膳  
いそかしや沖の時雨の真帆片帆 去 昌  
初霜に行や北斗の星の前 伊  
一いろも動くものなき霜夜哉 野 百  
淀にて 賀  
初霜に何さおよるそ船の中 其 角  
歸り花それにも敷ん庭きれ 同 兆  
禪寺の松の落葉や神無月 几 兆  
百舌鳥(ももぢ)の居る野中の杭よ 十 嵐  
月 嵐 蘭

(一卷養猿)

こからしや頼腫いたむ人の顔 芭  
砂よけや蚤のかたへの冬本立 几 蕉  
奈良にて 兆

棹鹿のかさなり臥る枯野かな 伊  
澁柿をなかめて通る十夜哉 膳 土  
茶の花やほる、人なき靈照女 越 所 芳  
養虫の茶の花ゆるに折られける 几 猿 道  
古寺の簀子も青し冬かまへ 几 兆

翁の堅田に閑居を聞て

雑炊の名ミころならば冬こもり 其 角  
この寒さ牡丹の花のまつ 裸 車 來  
草津

(一卷養猿)

草津(くさつ)東海道の  
一驛、名物姥か餅を賣  
る。

赤柏(あかかしわ)冬  
至にあらずとも、十一  
月朔日には赤豆飯を用  
ふる也。

生海鼠(なまね)

多賀(たが)近江多賀明  
神、高宮驛のみちはた  
に石の鳥居あり。

路通(ろと)勸進(くしん)に「い  
ねく」と人に言はれて  
も猶喰ひあらず旅のや  
ざりざこやら寒き居心  
をわびてしこあり。

晦日も過行姥のゐのこかな 尙 白  
神迎へ水口たちか馬の鈴 珍 碩

霜月朔旦

膳まはり外にもものなし 赤 柏 イ良カ  
水無月の水を種にや水仙花 デハ坂田  
今は世をたのむけしきや冬の蜂 ヲハリ  
尾頭のこゝろもさなき生海鼠哉 去 去  
一夜く寒き姿や釣干菜 イ探カ  
道はたに多賀の鳥居の寒さ哉 尙 尙  
茶湯こてつめたき日にも稽古哉 エト  
炭竈に手負の猪の倒れけり 几 兆  
住つかぬ旅のこころや置こたつ 芭 蕉

巴(ともえ)千鳥のむれ  
て渦巻をいふ。(標註)

背門口(せごぐち)

矢田の野(やたの)越  
前敦賀の浦つゞき也。  
(大鏡)

寢こころや巨燧蒲團のさめぬ内 其 角  
門前の小家も遊ぶ冬至かな 几 兆  
木兎やおもひ切たる晝の面 ヲハリ 芥 芥  
み、つくは眠る處をさ、れけり イ半カ 残 境 兆  
貧交  
ましはりは紙衣の切を譲りけり 丈 草  
浦風や巴をくつつすむら衛 曾 良 來  
あら磯やはしり馴たる友千鳥 去 邦  
狼のあま踏消すや濱ちぎり 史 邦  
背門口の入江にのほる千鳥哉 丈 草  
いつ迄か雪にまふれて鳴ちぎり 千 那  
矢田の野や浦のなくれに鳴衛 几 兆

余吾(よゝ)近江琵琶湖の一部也。

去來抄に「出版の後大津より先師の文に、柴の戸にあらす、此木戸なり―出版におよぶも改むべきよしなり」

元祿二年、奥細道行脚を了り、大垣にて竹戸に與へしにて、其の文「蓬萊島」に出づ。

筏士の見かへる跡や鴛の中木  
 水底を見て来た顔の小鴨哉丈草  
 鳥共も寐入て居るか余吾の海路  
 死るまで操もつなるらん鷹の顔旦菓  
 襟巻に首引入て冬の月杉風  
 柴の戸や鎖カギのさされて冬の月其角  
 輕尻の蒲團はかりや冬の旅ナカサキ暮年  
 見やるさへ旅人寒し石部山大津尼智月  
 翁行脚の古き衾をあたへらる記あり、略之  
 首出して初雪見はや此衾ミ竹ノ戸  
 題竹戸之衾  
 疊目は我手のあさそ紙衾曾良

膝突(ひざつき)小半疊のへりの附たる也(大鏡)

鵲(かささぎ)

朝飯(あさい)

魚のかけ鵜のやるせなき氷がな探丸  
 しつかさを數珠もおもはす網代守丈草  
 御白砂に候す

膝突にかしこまりる霞かな史邦  
 機欄の葉の霰に狂ふ嵐かな野童  
 鵲の橋よりこほす霰かなイ示カ蜂  
 呼かへす鮎賣見えぬあられ哉セ凡兆  
 みそれ降音や朝飯の出来る迄セ畫、好  
 初雪や内に居さうな人は誰其角  
 初雪や鷹部屋覗く朝朗史邦  
 霜やけの手を吹て遣る雪丸け羽紅  
 わきも子か爪紅粉のこす雪まろけ探丸

去來抄に「下京や」の五  
字、芭蕉の助言なりと  
見ゆ。

穂屋(はや)信濃御射山  
祭七月二十七日也。芒  
にて御假屋を造る、ほ  
やの芒さいふ也。

さしまごさ(豊島産)攝  
津豊島郡の特産也。

空也(くうや)釋光勝、  
延喜帝第二子也。

下京や雪つむ上の夜の雨凡  
なかくミ川一筋や雪の原同  
兆

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の芒の刈残し芭  
蕉

衰老は簾もあけす庵の雪其  
角

雪の日は竹の子笠そまさりける  
ヲハリ 羽 笠

誰こても健ならば雪の旅  
ナカサキ 卵 七

ひつかけて行や雪吹のしまこさ  
去 來

青亞追悼

乳呑子に世を渡したる師走哉  
尚 白  
から鮭も空也の瘦も寒の内  
芭 蕉

鉢たたき憐<sup>アハレ</sup>は顔に似ぬものか乙  
州  
一月は我に米かせ鉢たたき丈  
草

住吉奉納

夜神樂や鼻息白し面の内其  
イカ 順 角  
節季候に又望むへき事もなし  
同 祐 琢  
家くやかたちいやしき煤拂ひ  
甫

乙州か新宅にて

人に家をかはせて我は年忘芭  
蕉

弱法師我門ゆるせ餅の札其  
角

年の夜や曾祖父をきけは小手枕  
長 和

薄壁の一重は何かさしの宿去  
來

暮て行年のまうけや伊勢熊野  
同

弱法師(よろほうし)乞  
食也。江戸の町家に  
ても乞ひの來らぬや  
う、乞食頭へ料を與へ  
て、仕切らせる札紙の  
一、即ち餅の札(もち  
のふた)也(逆志抄)

元祿二年歲暮の吟也。



やりくれ(遺練)

幾くたり(袴のひたの  
條(すぢ)附ける也)

大さしや手のおかれたる人こころ 羽  
やりくれて又やさむしろ年の暮 其  
いねくく人にいはれつ年のくれ 路  
さしの暮破れ袴の幾くたり 杉  
風 通 角 紅

おもておこす(面起す)  
序に「此道のおもて起  
すへき時なれや」に應  
ず。面目ある意也。

角槽(すみやぐら)

猿蓑集卷之二

夏

有明のおもておこすやほこきす 其  
夏かすみ曇り行方や時鳥 木  
野を横に馬引むけよほこきす 芭  
子規けふに限りて誰もなし 尙  
時鳥何もなき野の門ン構へ 凡  
晝まではさのみいそかす時鳥 智  
蜀魂なくや木の間の角槽 史  
入相のひひきの中やほこきす 羽  
時鳥瀧よりかみのわたりかな 丈  
草 紅 邦 月 兆 白 蕉 節 角

無名抄に「身にぞしる  
眞野の入江に冬の來て  
千鳥もかるや鶴の毛  
衣」

うき我を 嵯峨日記に  
「獨すむほご面白きは  
なし、長嘯隱士の曰、  
客は半日の閑を得れば  
主は半日の閑を失ふこ  
素堂此こはを常に憐  
む予も亦」さあり。

慈母(じぼ)其角の母妙  
務尼(じぼ)眞享四年四月八  
日歿、墓は二本榎、上  
行寺也。

眞享五年四月、吉野紀  
行の折也。

古歌に「起出てもものに  
まきれぬ朝の心の心や  
もこの心なるらん」(標  
註)

落柿舎(らくしや)去  
來の別莊也、小堀遠州  
の邸跡なりといふ。

南都(なんご)奈良也。

心なき代官殿やほこきす去來  
戀死なは我塚てなけ子規遊奥州  
松島一見の時、千鳥もかるや鶴の毛衣こよめり  
ければ

松島や鶴に身をかれほこきす曾良  
うき我を淋しからせよ閑古鳥芭蕉  
旅館塵せまく、庭草を見す

若楓茶色に成も一さかり曲、水  
四月八日詣慈母墓

花水にうつしかへたる茂りかな其角  
葉かくれぬ花を牡丹の姿かな全ト峰

別僧

ちる時の心やすさよ米囊花越人  
智恵のある人には見せしけしの花珍碩  
翁に供せられて、すま、あかしにわたりて  
似合しきけしの一重や須磨の里亡杜人國  
青くさき匂ひもゆかしけしの花嵐蘭  
井の末に浅く清しかきつはた半殘  
起出てもまきれぬ朝の間の仙化  
起くの心うこかすかきつはた  
題去來之嵯峨落柿舎二句  
豆植る畑も木部屋も名所かな凡兆  
破垣やわささ鹿の子の通ひ道會良

南都旅店

豊國(さよくに)大阪方  
廣寺境内、豊臣秀吉を  
祀る。(大鏡)

さもし(照射)ねらひ狩  
又火串、夏山の狩也。

蛸壺(たこつぼ)蛸を取  
る器也。  
筑摩(つくま)近江坂田  
郡筑摩社、四月朔日の  
神事也。  
わたまし(移徒)家移り  
引越し也。

粽結ふ(ちまきゆふ)源  
氏總角に「うしろはし  
らす顔に額髪を引かけ  
つゝいろざりたり」赤  
草紙に芭蕉曰「物語の  
姿一集には有へきもの  
也」(大鏡)  
寛文四年の吟也。大阪  
役にて藤堂仁右衛門、  
同新七討死す。元和元  
年五月六日也。

かひ屋(飼屋)蠶を飼ふ  
家也。  
源氏須磨の巻に「明石  
のうらはたはひわた  
るほさなれば」貞亨五  
年の吟也。  
丈草隱遁の時に「多年  
負屋(蝸牛)化做(蛞  
蝓)得自由」

誰覗く奈良の都の園の桐の千那  
洗濯やきぬにもみこむ柿の花ヲハリ薄芝

豊國にて

竹の子の力を誰にたごふへき凡兆  
竹の子や畠隣に悪太郎去來

たけの子や稚すまき時の繪のすさひ芭蕉  
猪に吹かへさるるさもしかな正秀

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月芭蕉  
君か代や筑摩祭も鍋ひみつ越人

五月三日、わたましせる家にて

家根葺さ並んでふける菖蒲哉其角

粽結ふ片手にはさむ額髪芭蕉  
隈笹の廣葉うるはし餅粽エト岩翁  
淋しさに客人やさふまつりかな尙白  
五月六日、大阪討死の遠忌を吊ひて  
大阪や見ぬ世の夏の五十年イカ蟬吟  
奥州高館にて

夏草や兵共かゆめの跡芭蕉  
這出よかひ屋か下の蟻の聲同

此境はひわたるほご、こいへるも爰の事にや

蝸牛角ふりわけよ須磨明石同

五月雨に家ふり捨てなめくしり凡兆

ひね麥の味なき空や五月雨木節

馬士(うまかた)

實方(さねかた)右中將  
正四位陸奥守、長徳四  
年任國にて卒す。

奥の細道に「笠島は」

料足(れうそく)錢也

つゝくり(綴り)

馬士の謂次第也さつき雨史邦

奥州名取の郡に入て、中將實方の塚はいつくにや  
み尋侍れば、道より一里はかり左の方、笠島とい  
ふ處に有る教ふ。ふりつゝきたる五月雨、いこわ  
りなく打過るに

笠島やいつこ五月のぬかり道芭蕉

大和、紀伊の境はてなし坂にて、往來の順禮をこ  
めて、奉加す、めければ、料足つつみたる紙の  
はしに書つけ侍る。

つゝくりもはてなし坂や五月雨去來  
髮剃や一夜に金精て五月雨凡兆  
日の道や葵傾くさつきあめ芭蕉

老醫(らうい)村田忠庵  
が事也

六尺(ろくしゃく)駕昇  
也。

しからき(滋樂)近江の  
茶所也。

縫物や着もせてよこす五月雨羽紅

七十餘の老醫みまかりけるに、弟子共こそりてな  
くまゝ、予にいたみの句乞ける。その老醫いまそか  
りし時も、さらに見しれる人にあらさりければ、  
哀にも思ひよらすして、古來稀なる年にこそこい  
へこ、こかくゆるささりければ、

六尺も力おこしや五月雨其角  
百姓も麥にこりつく茶摘うた去來  
しからきや茶山しに行夫婦連正秀  
つかみあふ子供のたけや麥畑<sup>セ</sup>游、刀  
孫を愛して

麥藁の家してやらん雨蛙智月

眉掃(まゆはき)化粧道具也。  
聖德太子二歳の御像にして御袴をめさせ給ふ也(逆志抄)

麥出來て鏝エトまでくふ山家かな花紅

しら川の關こえて

風流のはしめや奥の田植うた芭蕉

出羽の最上を過て

眉掃を面影にして紅粉の花同

法隆寺開帳、南無佛の太子を拜す

御袴のはつれなつかし紅粉の花千那

田の畝の豆つたひ行螢かなイカ万乎

膳所、曲水の樓にて

螢火や吹こはされて鳴のやみ去來

勢田の螢見 二句

闇の夜や小供泣出す螢舟凡兆

八鬼尾谷(やきをたに)熊野山中也。

空つり(そらつり)病後の逆上也。

本朝文選に出づ、萬葉に「憶良らは今はまからん子なくらんその子の母も我をまつらん」

螢見や船頭酔ておほつかな芭蕉

三熊野へ詣ける時

螢見や笑おそろしき八鬼尾谷ナカサキ田上尼

あなかに鶉セリあはぬかもめ哉 尙 白

草むらや百合は中く花の顔 半 殘

病後

空つりやかしらふらつく百合の花大サカ何處

涼風や我より先に百合の花 乙 州

焼レ蚊ヲ辞ヲ作りて

子や泣ん其子の母も蚊の喰ん 嵐 關

錢別

立さまや蚊屋もはつさぬ旅の宿セ里、東

うさく(有徳)富豪也

吉次(きちじ)金賣橋次  
信高。五元集に「夏の夜  
を吉次か冠者の恨哉」  
隙明(ひまあき)

舟曳唄に「花にねぶた  
き、魚にねぶらず、我  
は夜すがらいねでせこ  
まつ」(大鏡)

蟻(すみし)朽木に蟻を  
かけたる如く生ずる蟲  
也(逆志抄)

日の岡(ひのおか)京と  
大津の間、一里塚の西  
也。

しねんこ(自然枯)竹は  
五十年にして、花咲き  
實を結び、其竹則枯也。

千子(せんし)去來の妹  
にて元祿元年歿。

うさく成、人につれて參宮する従者に、はなむけ  
して、

みしか夜を吉次か冠者に名残哉 其 角  
隙明や蚤の出で行耳の穴 丈 草  
下闇や地虫なからの蟬の聲 嵐 雪  
客ふりや居所かへる蟬のこゑ 探、 雪  
頓て死ぬけしきは見えす蟬のこゑ 芭 蕉  
哀さや盲麻刈る露の玉 槐、 市  
渡りかけて藻の花覗く流かな 凡 兆  
舟引の妻の唱哥かねふの花 千 那  
白雨や鐘聞はつす日の夕 史 邦

素堂の蓮池邊

白雨や蓮一枚の捨あたま 嵐 蘭  
日焼田や時くつらく鳴蛙 乙 州  
日のあつさ鹽の底の蟻かな 凡 兆  
水無月も鼻つきあはす數奇屋哉 同 秀  
日の岡やこかれて暑き牛の舌 正 秀  
た、暑し籬によれば髪 落 木 節  
しねんこの藪吹風そあつかりし 野 童  
夕顔によはれてつらき暑さ哉 羽 紅  
青草は湯入なかめんあつさ哉 巴、 山  
千子の身まかりけるを聞て、みのの國より去來か  
もこへ、申つかはし侍ける。  
なき人の小袖も今や土用干 芭 蕉

月鉾(つきほこ)六月七日  
祇園祭の鉾也。

水無月や朝めしくはぬ夕す、み嵐  
したらくに寝れは涼しき夕部かな 宗次  
す、しさや朝草門に荷ひ込 凡兆  
唇に墨つく兒のすすみかな 千那  
月鉾や兒の額の薄粧マシ會良  
夕暮や岨サ並ひたる雲の峰去來  
はしめて洛に入て  
雲の峰今のは比叡に似た物か 大サカ道

猿蓑集卷之三

秋

秋風や蓮をちからに花ひみつ 不知讀人  
此句東武よりきこゆ、もし素堂か  
かつくりこぬけ初る齒や秋の風 杉風  
芭蕉葉は何になれこや秋の風 路通  
人に似て猿も手を組秋のかせ 珍碩  
加賀の全昌寺に宿す

終夜秋風きくや裏の山會良  
芦原や鷺の寝ぬ夜を秋の風 江山川  
朝露や鬱ウツ金コネ島のあきの風 凡兆

全昌寺(ぜんしょうじ)城下。  
大聖寺の城下。  
終夜(よもすがら)  
鬱金の葉はたんざくこ  
云ふ草の葉に似て、若  
荷の葉七八枚を大きく  
したる如きもの也。(逆  
志抄)

はこぶ(運ぶ)

ころぶ(轉)早く逢はん  
と急ぎて也。

ぬかご(零余子)

初露や猪の臥芝の起あかり去來  
 大比叡やはこぶ野菜の露しけし野童  
 三葉ちりて跡は枯木や桐の苗凡兆  
 文月や六日も常の夜には似す芭蕉  
 合歡の木の葉こしもいさへ星のかけ同  
 七夕や餘りいそかはころふへしイカ少年杜若  
 都にも住ましりけり角力取去來  
 朝顔は鶴眠る間のさかりかなイカ風麥  
 薺やぬかこの蔓のほさかれすセ及、肩  
 笑にも泣にも似さる木槿かな嵐蘭  
 手をかけてをらて過行木槿哉杉風  
 高灯笼晝は物うき柱かな千那

秋徹雨り(あきしめり)  
秋の長雨のつゞきてし  
めくしたるをいふ  
也。(逆志抄)

枳(あふこ)今の天秤棒  
也。

日見(ひみ)長崎より大  
村に通る間の嶺也。  
卯七(うしち)去來の甥  
也、長崎に住す。

果もなく瀬の鳴音や秋徹雨り史邦  
 そよくや藪の中より初あらし旦菓  
 秋風やまても芒は動くはつミカハ子尹  
 迷ひ子の親のこころや芒原羽紅  
 八瀬、をはらに遊吟して、柴うりの文書るついで  
 に

まねきく枳の先の芒かな凡兆  
 つくしよりかへりけるに、日見いふ山にて、卯  
 七に別れて  
 君が手もまじるなるへし花芒去來  
 草刈よそれか思ひか萩の露ヒラタ李由

元祿二年翁に供せられて、みちのくより三越路に



いせ(伊勢)曾良は同國  
長島の藩に仕へし事あり  
先達(さきたち)奥細道  
に「曾良は腹を病て伊  
勢國長島云ふ所にゆ  
かりあれは先立て行  
に」こあり。

いせ(龜馬)

かかり行脚しけるに、かかの國にていたはり侍り  
て、いせまで先達けるこて、

いつくにかたふれ臥さも萩の原 曾良  
桐の木にうつら鳴なる塀の内 芭蕉  
百舌鳥<sup>ス</sup>鳴や入日さし込女松原 凡<sup>亡</sup>兆  
初雁に行燈さるなまくらもさ 落<sup>人</sup>栢

堅田にて

病雁の夜寒に落ちて旅寐哉 芭蕉  
海士の家は小海老にましろいさこ哉 同 蕉

加賀の小松云所、多田の神社の寶物として實盛  
か菊から草のかふこ、同じく錦のきれ有。遠き事  
なから、まのあたり、あはれにおほえて

諸曲實盛に「あなむざ  
んやな齋齋別當にて候  
ひけるぞや」

松かさ(松笠)  
しで(四手)幣也。撰集  
抄に「かこまるしで  
に涙のかかるかな又い  
つかはさおもふあはれ  
に」なこ(柵尾)加茂の社  
の攝社也。

むさんやな甲の下のきりくす 芭蕉  
菜畑や二葉の中のむしの聲 尙 白  
機おりや壁に来て鳴夜は月よ 風 麥  
いせにまうてける時

葉月や矢橋に渡る人さめん 亡<sup>千</sup>人 子  
三日月に<sup>カ</sup>のあたまをかしくしけり 之 道  
粟稗さめてたく成りぬ初月夜 半 残  
月見せん伏見の城の捨廊<sup>ク</sup> 去 來  
翁を茅舎に宿して

おもしろう松かさもえよ薄月夜 伊<sup>土</sup>カ 芳  
賀茂に詣、してに涙のかかる哉、かの上人のた  
なこの社の神垣に、取つきてよみしこや。

かみそり(髮剃)お剃刀にて本願寺(六條)の上人に就き剃髪する式也。

たぶさ(鬘)

氣比(けひ)越前一宮也遊行(ゆきやう)一遍上人を開祖とする、藤澤清浄光寺代々の住職をいふ也。

猶子(いうし)甥也。

月かけや拍手もる、膝の上史邦  
友達の六條にかみそりいたたくてまかりけるに、  
かけ法師たぶさ見送る朝月夜 卓イカ袋  
芭蕉葉や打かへし行月のかけ 乙州  
京筑紫去年の月さふ僧仲間 丈草  
吹風の相手や空に月ひみつ 凡兆  
降りかねて今宵に成りぬ月の雨 尙白  
向のよき宿も月見る契イサかな 曾良  
元祿二年つるかの湊に月を見て、氣比の明神に詣、  
遊行上人の古例を聞て  
月清し遊行のもてる砂の上 芭蕉  
仲秋の望、猶子を送葬して

一戸(いちのへ)陸奥南部也。

溢糟(しぶかす)柿滋の粕也。  
きぼう(鮭)かじかに似て鱸に刺あり、ゴキゴキと聲す。(逆志抄)

かかる夜の月も見にけり野邊送り 去來  
明月や處は寺の茶の木はら 昌房  
月見れば人の礎にいそかはし 羽紅  
僧正のいもこの小屋のきぬた哉 尙白  
初潮や鳴門の浪の飛脚舟 凡兆  
一戸や衣もやふる、駒むかへ 去來  
稗の穂の馬逝したる氣色哉 越人  
溢糟やからすも喰す荒島 正秀  
あやまりてききうおさへる 蟻カシカ嵐 蘭  
一鳥不鳴山更幽

物の音ひさり倒る、かかしかな 凡兆  
むつかしき拍子も見えず里神樂 曾良

鳩ふく手を合せて、  
鳩の聲を吹きまねて捕  
へる也。  
上行(うへゆく)

田舎間(いなかま)京間  
の六寸二分に對し、五  
尺八寸也。

うなる(童子)

落柿舎の記、本朝文選  
に出づ。

神田祭(かんたまつり)  
隔年九月十五日執行、  
宗對馬守の御道具を借  
り用ひしなり。

風ほろし(風疹)はしか  
也。

はさかふ 挟まる也。

旅枕鹿のつき合軒の下<sub>エト</sub>千里  
鳩ふくや澁柿原の蕎麥畠珍碩  
上行ミ下來る雲や秋の天凡兆  
鱈釣日頃も有らし鱸つり半殘  
田舎間の薄へり寒し菊の宿尙白  
菊を切あこまはらにもなりにけり其角  
高土手に鶉の鳴日や雲ちきれ珍碩  
この頃のおもはるる哉稻の秋土芳  
稻かつく母に出迎ふうなる哉凡兆  
自題落柿舎  
柿ぬしや梢はちかきあらし山去<sub>カ、小松</sub>來  
しら浪やゆらつく橋の下紅葉塵<sub>カ、小松</sub>生

肌寒し竹切山の薄紅葉凡兆

神田祭

されはこそひなの拍子のあなるかな

神田祭の鼓うつ音蚊足

拍子さへあつまなりこや。

花芒大名衆をまつりかな嵐雪  
行秋の四五日弱<sub>ヨロ</sub>るすゝきかな丈草  
立出る秋の夕や風ほろし凡兆  
世の中は鶴鴿の尾の隙もなし同  
塩魚の齒にはさかふや秋の暮荷兮

猿蓑集卷之四

勸進帳、路通撰に「正月廿九日月次與行通題梅」あり。  
上藤(じやうろう)菊亭殿ならんか去來は其家に仕へし人也。(標註)

春

梅 咲て 人の 怒の 悔も あり 露 沾

上藤の山莊に、ましくけるに候し奉りて

梅 か 香や 山路 獵入る 犬の まね 去 來

梅 か 香や 分入 里は 牛の 角 句、 空

庭興

梅 か 香や 砂利 敷流す 谷の 奥 土 芳

初 蝶や 骨なき 身にも 梅の 花 半 殘

梅 か 香や 酒の 通ひの あたら しさき 膳 所 鼠

う めの 木や 此一 筋を 落の たう 其 角

(四卷猿蓑)

元祿元年の吟笈の小文に見ゆ。御子良子(おこら)太神宮の神饌に奉仕する少女也。

子良館の後に梅有こいへは

御 子 良 子 の 一 も さ ゆ か し 梅 の 花 芭 蕉

瘦 藪 や 作 り た ふ れ の 軒 の 梅 千 那

灰 捨 て 白 梅 う る む 垣 根 か な 凡 兆

日 當 の 梅 咲 こ ろ や 屑 牛 房 支、 幽

暗香浮動月黄昏

入 相 の 梅 に 鳴 り 込 ひ ひ き か な 風 麥

武江におもむく旅亭の残夢

寢 くる し き 窓 の 細 目 や 闇 の 梅 乙 州

辛未のこし彌生のはしめつかた、よしのの山に日

くれて梅の匂ひしきりなりければ、舊友嵐窓か、

見ぬ方の花や匂ひを案内者 さいふ句を、日ころ

(四卷猿蓑)

林和靖の詩句也。

辛未(しんぴ) 元祿四年。

はふるき事のやうにおもひ侍れども、折にふれて  
感動身にしみわたり、泪もおこすはかりなれば、  
その夜の夢に正しくまみえて、悦るけしき有。亡  
人いまた風雅を忘れさる也。

夢去てまた一句ひ宵の梅嵐  
百八のかねて迷ひや闇の梅其角  
ひこり寐もよき宿きらん初子日去  
野畠や雁追のけて摘若菜史邦來  
初市や雪に漕來る若菜舟嵐蘭  
宵の月西に薺のきこゆなり如行  
憶<sup>レ</sup>翁<sup>ノ</sup>客<sup>中</sup>  
裾折て菜をつみしらん草枕嵐雪

百八(ひやくはち)百八の鐘にて、煩惱の闇に掛る也。

鯀(ごぢやう)

薄氷(うすらひ)

摘捨て踏付かたき若菜かな路通  
七種や跡にうかるる朝からす其角  
我事<sup>ミ</sup>鯀の迹し根芹哉丈草  
薄氷やわつかに咲る芹の花其角  
臙<sup>ミ</sup>は松の黒さに月夜かな同  
鉢たたき來ぬ夜<sup>ミ</sup>なれば臙也去來  
鶯の雪踏落す垣穗かな<sup>イカ</sup>  
鶯やはや一聲のしたりかほ<sup>エト</sup>溪石  
うくひすや遠路なから禮かへし其角  
鶯や下駄の齒につく小田の土凡<sup>イカ</sup>兆  
藪の雪柳はかりはすかたかな探丸

灸(やいこ)窓に凭りて灸する也

此瘤(このこぶ)柳のこぶを猿の腰かけに見立し也

よこた川 地名にあらす、田溝の事也。

場(には)

くたり月 廿日正月の頃か。(標註)

當座(たうざ) 即席の題詠也。

二二四

此瘤はさるの持へき柳かな  
垣こしにきらへて放す柳かな  
よこた川植處なき柳かな  
青柳のしたれや鯉の住處  
雪汁や蛤いかす場のすみ  
待中の正月もはやくたり月揚  
田家に有て  
麥飯にやつるる戀か猫の妻  
うらやまし思ひきる時猫の戀  
うき友にかまれて猫の空なかめ  
露沾公にて餘寒の當座  
春風にぬきも定めぬ羽織かな  
龜翁  
宅 遠 尚 一カ 同 揚 芭 越 去 來 人 燕 水 白 啖 白 水

(四卷 猿蓑)

こぶ(産)

骨柴(ほねしば) 枯れし柴也。

あらおこし(荒起)

虚木立(からこたち) 逆志抄に「うろこたち」を讀むべし控(うろ)と同一に成たる中より陽炎の兒ゆる也さいへり。

二二五

野の梅のちりしほ寒き二月哉  
出かはりや櫃にあまれるこさの丈  
出代や幼(わか)ころに物あはれ  
骨柴の刈られなからもこの芽哉  
白魚や海苔は下部の買合せ  
人の手にみられて後やさくら海苔  
春雨にたたき出したりつくし  
陽炎やさりつき兼る雪のうへ  
かけろふや土もこなさぬあらおこし  
陽炎やほろく 落る岸の砂  
糸遊のいさあそふ也虚木立  
野馬に子供遊はす狐かな  
尚 龜 嵐 凡 其 杉(ヲハッ) 元 荷 百 土 氷(イカ) 凡 兆  
翁 雪 兆 角 峰 志 今 分 歳 芳 固 兆

(四卷 猿蓑)

紫胡(のせり)藥草也。  
逆志抄は(さい)こ訓

狗背(せんまい)

田養の島(たみのしま)  
(攝津西成郡、今の北  
濱也)

かけるふや柴胡の原の薄曇芭蕉  
 いさゆふに顔引のはせ作り獨活イカ配力  
 狗背の塵にえらる、蕨かな嵐雪  
 彼岸前寒さも一夜二夜哉路通  
 みの虫や常のなりにて涅槃像野水  
 藏並ふ裏は燕の通ひ道凡兆  
 立さわく今や紀の雁伊勢の雁イ澤カ雉  
 春雨や屋根の小草に花咲ぬ嵐虎  
 高山に臥て  
 春雨や山より出る雲の門猿雖  
 不性さやかき起されし春の雨芭蕉  
 春雨や田養の島の鯨賣史邦

去來抄に「畦うつり」の  
書損なりと見ゆ。  
木舞(まひ)壁の心に  
くむ竹也。

臍(ほそ)へそ也、田螺  
をへそと見立し也。

きぼ(疑蓋)葱の花也。

潦(にはたすみ)文選註  
に「雨水流於地者」  
こもく(芥)こみくづ也

はる雨のあかるや軒になく雀羽紅  
 泥龜や苗代水の畦ヒつたひ史邦  
 蜂こまる木舞の竹や虫の糞昌房  
 振舞や下座になほる去年の雛去來  
 春風にこかすな雛の駕の衆イ荻カ子  
 桃柳配りありくや女の子羽紅  
 桃の花境しまらぬ垣根かなミカハ鳥巢  
 里人の臍落したる田螺かな嵐推  
 蝶の來て一夜寐にけり葱のきほ半殘  
 紙鳶切れて白根か嶽を行へ哉カ、山中桃妖  
 いかのほり爰にもすむや潦イ園カ風  
 日のかげやこもくの上の親すすめ珍碩

荷鞍ふむ春の雀や椽の先士芳  
闇の夜や巢をまこはして鳴衛芭蕉  
越より飛彈へ行きて、籠の渡りのあやうき所々、  
道もなき山路にさまよひて

樟(くす)

嵯峨日記に「むかし誰  
小鍋あらひし葦草」  
木瓜(ほけ)蒟(あざみ)

鶯の巢の樟の枯枝に日は入ぬ凡兆  
霞より見え来る雲のかしら哉イカ石口  
子や待んあまり雲雀の高上り杉風  
ひはり鳴中の拍子や雉子の聲芭蕉  
芭蕉庵のふるきを訪  
董草小鍋洗ひしあみやこれ曲水  
木瓜蒟旅して見たく野はなりぬエト山店  
畫讚

(四卷箋猿)

焙爐(ほいろ)茶を乾かす道具

笄(かうがひ)

古今集に「鶯の笠にぬ  
ふてふ梅の花をりてか  
ざん老かくるやさ」  
梅を椿に取なしたる也

山吹や宇治の焙爐ホイロの匂ふ時芭蕉  
白玉の露にきはつく椿かな車來  
我身かよわく病かちなりければ、髪けつらんも物  
むつかしき、此春さまをかへて

笄も櫛もむかしやちり椿羽紅  
蝸牛打かふせたるつはきかな津國山本坂上氏  
鶯の笠落したる椿かな芭蕉  
初さくらまた追くに咲はこそイカ利雪

東叡山に遊ふ

小坊主や松にかくれて山さくら其角  
一枝はをらぬもわろし山さくら尙白  
雞の聲もきこゆる山さくら凡兆

(四卷箋猿)



はつく(小端)  
常齋(じやうさき)午時  
の食也、晝餉也。  
葛城(かつらぎ)一言主  
の神を祭る、そのかた  
ち見難きこと奥儀抄に  
見ゆ。

東武(とうぶ)江戸也。

江談抄に「玄實僧都、都  
を辭する時、遠つ國は  
山水きよしことおほき  
君か都はすますまされ  
り」(逆志抄)

花靱(はなうづぼ)箭の  
さや也、矢を盛る器。

古歌に「見わたせは麓  
はかりに咲そめて花に  
おくあるみよしの山」

道灌(たうくわん)太田  
持資也、文明十八年鎌  
倉にて討死す。

眞先に見し枝ならんちる櫻丈草  
有明のはつくに咲く遅さくら史邦  
常齋にはつれてけふは花の鳥千那  
葛城のふもこを過る  
猶見たし花に明行神の顔芭蕉  
伊賀の國花垣の庄は、そのかみ奈良の八重櫻の料  
に附られけるこ、云傳へ侍れは  
一里は皆花守の子孫かや同  
亡父の墓東武谷中に有しに、三歳にて別れ、廿年の  
後かの地にくたりぬ。墓の前に櫻植置侍るよし、  
かねく母の物かたりつたへて、其櫻を尋佐ける  
に、他の墓、猶さくら咲みたれ侍れは

(四卷簑猿)

まかはしや花吸ふ蜂の往還り園風  
知人にあはじくミ花見かな去來  
ある僧の嫌ひし花の都哉凡兆  
浪人のやみにて

鼠共春の夜あれそ花靱半殘  
腥きはな最中のゆふへ哉伊賀長眉

花も奥ありみや、よしのに深く吟し入て

大峰やよしのの奥の花の果曾良  
道灌山にのほる

道灌や花はその代を嵐かな嵐蘭  
源氏の畫を見て

欄干に夜ちる花の立姿羽紅

(四卷簑猿)

也。庚午(かうご)元祿三年

樞(くる)戸のおとし  
さほその事也。

泊船集、風國撰に「大  
和行脚のさきに、丹波  
市さかやいふ所にて、  
日の暮れかゝりけるに  
藤のおほつかなかく咲  
たるを」さあり。

鸞(うそ)

木曾義仲、元暦元年正  
月栗津原にて討死す。

庚午の歳、家を焼て

燒にけりされさも花はちりすまし加賀枝

花ちるや伽藍の樞おとし行凡兆

海棠の花は満たり夜の月江戸船

大和行脚の時

草臥て宿かるころや藤の花芭蕉

山鳥や躑躅よけ行尾のひねり探丸

山つゝし海に見よさや夕日影智月

さかくして卯の花つほむ彌生哉山川

鸞の聲聞初てより山路哉伊賀之

木曾塚

其春の石さもならず木曾の馬乙州

春の夜は誰か初瀬の堂籠り曾良

望湖水惜春

行春を近江の人さをしみける芭蕉

猿蓑集卷之五

刷(かひつころひ)白氏文集に「々刷ニ毛衣」

おさす(威)

まいら戸細き棧のある戸也。

めりやす(莫大小)

鷲の羽も刷カイツコロヒぬはつしくれ去  
 一ふき風の木の葉しつまる芭  
 股引の朝からぬるる川こえて凡  
 たぬきをおさす篠張の弓史  
 まいら戸に蔦這かかる宵の月  
 人にもくれす名物の梨  
 書なくる墨書をかしく秋暮て  
 はきこころよきめりやすの足袋  
 何事も無言のうちはしづかなり  
 里見え初て午の貝ふく  
 蕉 來 兆 邦 來 蕉 邦 兆 來 蕉 來 兆 邦 來 蕉 邦 兆 來

(五卷猿蓑)

ねこさ(寐莫塵)

すいぜんじ(水前寺)肥後熊本の水前寺の池に生ずる海苔也。

盧同(ろどう)唐の茶人にて茶賦の作者也。

雪けゆき(ゆき)氣雪降らんこ黄昏雲の立つをいふ也(標註)

ほつれたる去年のねこさのしたたる、  
 芙蓉の花のはらくさちる  
 吸ものは先出来されしすいせんし  
 三里あまりの道かかえける  
 此春も盧同か男居なりにて  
 さし木つきたる月の朧夜  
 苔なから花に並ふる手水鉢  
 ひさり直りし今朝の腹立  
 いちさきに二日の物も喰て置  
 雪けに寒き鳴の北風  
 火さもしに暮れは登る峰の寺  
 ほささきす皆鳴仕舞たり  
 蕉 來 兆 邦 來 蕉 兆 邦 來 蕉 邦 兆 來 蕉 來 兆 邦 來 蕉 邦 兆 來

(五卷猿蓑)

枳殼垣(きこくがき)からたちの垣根也。

青天(せいてん)

ぬのこ(布子)

たゝら(燼燻)ふいご也その火炎を雲の赤きこいへる也。

瘦骨のまた起直る力なき隣をかりて車引こむうき人を枳殼垣よりくくらせんいまや別れの刀さし出すせはしけに櫛てかしらをかきちらしおもひ切たる死くるひ見よ青天に有明月の朝ほらけ湖水の秋の比良の初霜柴の戸や蕎麥ぬすまれて歌をよむぬのこ着習ふ風の夕くれ押合て寐ては又立假まくらたゝらの雲のまた赤き空

邦 兆 蕉 來 邦 兆 來 蕉 兆 邦 來 蕉 兆

鞆(しりがい)馬の尻より鞍につなぐ紐緒也。

うるめ(鱧)鯛に似たり乾してひものしこす。

さびようし(度拍子)不搭好なるをいふ也。

一構鞆つくる窓のはな枇杷の古葉に木の芽もえ立去來九 芭蕉九 凡兆九 史邦九

邦 兆

市中はものの匂ひや夏の月凡あつしくミ門くの聲芭二番草取も果さす穂に出て去灰うちたたたくうるめ一枚此筋は銀も見しらす不自由さよたゝさひようしに長き脇差草むらに蛙こはかる夕間暮

兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆

刈菅道心の歌に「山ざ  
くらまたひご花もちら  
ぬ間にころのよそに  
きくあらしかな」

しわぶる(唔)しやぶる  
也。

茴香(ういきやう)藥草  
にて香料に用ふる也。

地子(ぢご)年貢米也。

路の芽まりに行燈ゆりけす  
道心のおこりは花のつほむ時  
能登の七尾の冬は住うき  
魚の骨しわふる迄の老を見て  
待人入し小御門の鑑  
立かゝり屏風を倒す女子共  
湯殿は竹の簀の子佗しき  
茴香の實を吹落す夕あらし  
僧や、寒く寺にかへるか  
猿引の猿ミ世を経る秋の月  
年に一斗の地子はかる也  
五六本生木つけたるミツタマリ瀦

蕉 來 兆 蕉 來 兆 蕉 來 兆 蕉 來 兆 蕉 來 兆 蕉

黒ぼこ 黒土也。

でつち(丁稚)

てんじやうまもり (天  
上守)唐辛子也。

升降(ますおとし)鼠を  
取る爲めの鼠也。

足袋踏よこす黒ぼこの道  
追たて、早き御馬の刀持  
てつちの荷ふ水こほしたり  
戸障子もむしろかこひの賣屋敷  
てんじやうまもりいつか色つく  
こそくミ草鞋を作る月夜さし  
蚤をふるひに起し初秋  
その儘にころひ落たる升降  
ゆかみて蓋のあはぬ半櫃  
草庵にしはらく居ては打やふり  
いのち嬉しき撰集のさた  
さまざまに品かはりたる戀をして

蕉 來 兆 蕉 來 兆 蕉 來 兆 蕉 來 兆 蕉 來 兆 蕉 來 兆 蕉

浮世の果は皆小町也  
何ゆゑそ粥すするにも泪くみ  
御留守さなれば廣き板敷  
手の平に虱這する花のかけ  
かすみうこかね晝のねふたき

凡兆十二芭蕉十二去來十二

蕉來兆蕉來

灰汁桶(あくをけ)  
かすり(掠)こゝは惜しむ意也

灰汁桶の雫やみけりきりくす  
あふらかすりて宵寐する秋  
新疊敷ならしたる月かけに  
ならへてうれし十の盃去

蕉兆蕉水來

たひら雪かたびら雪  
にて唯ひらく降雪也  
(標註)

摩耶(まや)攝津、天上  
寺といふ觀音及び摩夫  
人を安置す  
かますこ(梭魚子)  
口處(くちご)蛭の汲ひ  
付たる口也

千代經へきものをさまく子日して  
鶯の音にたひら雪ふる  
乗出して肱にあまる春の駒  
摩耶か高根に雲のかかれる  
夕めしにかますこ喰は風薫  
蛭の口處をかきて氣味よき  
ものおもひけふは忘れて休む日に  
迎せはしき殿よりのふみ  
金罍(かなづ)三人によはる、身の安さ  
あつ風呂すきの宵くの月  
町内の秋も更行明やしき  
何を見るにも露斗なり

蕉兆蕉來水蕉兆水來兆蕉來水

西念(さいねん)西行の  
初名、保延三年北山西  
念寺にて剃髮す。年二  
十三(大鏡)

有明し(ありあかし)有  
明行灯也。

おもひ草 八雲御抄に  
龍騰なりとす。

あかそぶ(赤遊)

花さちる身は西念か衣着て  
木曾の酢莖に春もくれつ、  
かへるやら山陰傳ふ四十から  
柴さす家のむねをからける  
冬空のあれに成たる北おろし  
旅の馳走に有明しおく  
すさましき女の智恵もはかなくて  
何おもひ草狼のなく  
夕月夜岡の萱ねの御廟守る  
人もわすれしあかそぶの水  
うそつきに自慢いはせて遊ふらん  
又も大事の餅をこり出す

蘭(の)疊表に用ひる水  
草也。  
櫻を正花に用ひしは、  
祖翁一世に此卷のみか  
(標註)

乙州(おさくに)近江大  
津の蕉門。

堤より田の青やきていさきよき  
加茂の社はよき社也  
物賣の尻聲高く名乗すて  
雨のやこりの無常迅速  
晝眠る青鷺の身の尊さよ  
しよろく水に蘭のそよく覽  
糸櫻腹一はいに咲にけり  
春は三月曙のそら

凡兆九 芭蕉九 野水九 去來九

兆 蕉 水 來 兆 蕉 水 來 兆 蕉 水

饑乙州東武行

しき(棄)もち米を蒸してつくり、神前に備ふるもの(大鏡)

發心の 去來文に「實の西行をおもひよせたる句にて候」さあり。

笑手(みのて)大鏡に「きのて」さよむべし、陳立の法にて箕屋の座にかたざれる也。

懐に、鏡の柄に、春の日に、<sup>二</sup>にの字並びて、今は嫌ふべけれと、古人は斯る瑣々たる事は論ぜざるにや(標註)

店屋(てんや)

梅若菜まりこの宿のころ、汁芭  
笠あたらしき春の明ほの乙  
雲雀鳴小田に土持ころなれや珍  
しき祝うて下されにけり素  
片隅に虫齒かかえて暮の月  
二階の客はた、れたるあき  
放やるうつらの跡は見えもせず  
稲の葉延のちからなき風  
發心の初にこゆる鈴鹿山  
内藏頭かき呼聲はたれ  
卯の刻の箕手に並ふ小西方  
すみきる松のしつかなりけり  
男 碩 州 蕉 碩 男 蕉 州 男 碩 州 蕉

萩の札薄の札によみなして  
雀かたよる百舌鳥の一聲智  
懐に手をあたたむる秋の月凡  
汐さたまらぬ外の海つら  
鏡の柄に立すかりたる花の暮去  
灰蒔ちらすからし菜の跡  
春の日に仕舞てかへる經机正  
店屋ものくふ供の手かはり  
汗ぬくひ端のしるしの紺の糸半  
別れせはしき雞の下土  
大膽におもひくつれぬ戀をして  
身はぬれ紙の取所なき  
芳 殘 芳 殘 來 秀 兆 來 州 兆 月 州



蛤刃(はまくりは)職人  
盡あま歌うた合あはにつつまてか  
はまくりはなる小刀の  
あふべき事のかなはざ  
るらん  
大年(おほとし)大晦日  
也

くゝる(括)

咳聲(しはぶき)

こくめん(刻面)律義な  
る事。

小刀の蛤刃なる細工はこ  
棚に火きもす大年の夜園  
爰もきはおもふ便も須磨の浦猿  
むね打合せ着たる肩衣  
此度もかなめをくゝる破扇  
醬油ねさせてしはし月見る  
咳聲の隣はちかき椽つたひ  
添はそふほきこくめんな顔  
形なき繪を習ひたる會津盆嵐  
薄雪かゝる竹の割下駄史邦  
花にまたこきしのつれも定らす野水  
雛の袂を染る春かせ羽紅

(五卷集猿)

猿集卷之六

幻住庵記

芭蕉 艸

石山(いしやま)近江。  
國分寺(こくぶじ)聖武  
天皇天平平九九年年救救して諸  
國國に建立立す。國分村鎮  
守守近津尾八幡宮也。

唯一(ゆい、つ)神道。

幻住老人(けんじゅうら)  
うじん膳所侯の家士、  
木多氏八郎左衛門、號  
を探山山居居士士さいふ。  
元祿三年、芭蕉四十七  
歳

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふなる  
へし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事、三曲二百歩にして八幡宮た、せたま  
ふ。神體は彌陀の尊像さかや。唯一の家には甚忌なる事を兩部光を和け、利益の  
塵を同うしたまふも又貴し。日頃は人の詣さりければ、いこみ神さひ物しつかな  
る傍に住すてし草の戸あり。蓬、根笹、軒をかこみ屋根もり壁落て、狐狸ふしこ  
を得たり。幻住庵さいふ。あるしの僧何かしは、勇士菅沼氏曲水子の伯父になん  
侍りしを、今は八年斗昔に成りて、正に幻住老人の名をのみ残せり。予又市中を  
さる事十年斗にして、五十年や、近き身は養虫のみのを失ひ、蝸牛家を離れて、  
奥羽、象潟の暑き日に面をこかし、高すなこ、あゆみくるしき北海の荒磯にきひ

(六卷集猿)

きびす(腫)

瀟湘(せうしやう)支那の瀟水、湘水の二川也。洞庭(とうてい)支那の名湖也。

城(しろ)膳所。橋(はし)瀬田。

笠取(かさとり)山城也

十峯(しほう)不二山也

田上山(たなかみやま)さふ(篠生)近江粟田郡。

黒津(くろつ)近江田上山の麓也。

すを破りて、今歳湖水の波に漂ふ。鳩の浮巢の流こ、まるへき、菅の一本の蔭たのもしく、軒端茨あらため、垣根結添なこして、卯月の初いさかりそめに入し山の、やかて出しこさへおもひそみぬ。さすかに春の名残も遠からず。つゝし咲残り、山藤松に懸りて、時鳥ははく過る程、宿かし鳥の便さへ有を、木つゝきのつゝくもいこはしなこ、そぞろに興して魂、吳楚東南にはしり、身は瀟湘、洞庭にたつ。山は未申にそはたち、人家よき程に隔り、南薫峰よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣たるる舟有。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗こるうた、螢飛かふ夕闇の空に水雞のたたき音、美景物こしてたらすこ云事なし。中にも三上山は土峰の佛にかよひて、武蔵野のふるき栖もおもひいてられ、田上山に古人をかそふ。ささふか嶽、千丈か峰、袴腰いふ山あり。黒津の里はいこくろう茂りて、網代守にそこよみけん萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからんこ、後の峰に這登り、松

(六卷 養猿)

王翁(わうおう)王道人參(さん)禪四方、歸結(きけつ)屋於主(しゅ)笠上(かさかみ)除簿(ぢよぼ)家(か)有(あ)海棠(かいとう)數株(かずしゆ)結(むす)巢(ね)其上(そのかみ)房顔(ぼうげん)せんがん山の高き也。古歌に「こくくさ落る岩間の苦しみつ汲ほす人もなき住居かな」高良山(かうらさん)筑後(ちくご)僧正(そうじょう)は連臺院(れんたいえん)主(しゅ)如僧正(にょそうじょう)也。甲斐(かひ)加茂(かま)の祠官(しご)藤井(ふじい)甲斐守(かひのまもり)敦直(とんちく)能書(のりかき)家(か)也。

檜笠(ひのきかさ)菅簍(すがみの)

農談(のうだん)朱晦庵(しゆゐあん)の詩(し)に「野人(やにん)載(のり)酒來(しゆらい)農談(のうだん)日(ひ)己(こ)夕(ゆふ)夜座(やざ)唐詩(たうし)に「夜坐(やざ)厭(いと)江上月(かうげがづき)月(つき)閑(ひま)雨(あめ)まうりやう」うすきもの影也。

の棚作り、葉の圓座を敷て、猿の腰掛名付。彼の海棠に巢をいこなひ、主簿峰に庵を結へる王翁、徐佗か徒にはあらず。唯、睡癖山民こ成て、房顔に足をなけ出し、空山に虱を捫て坐す。たま／＼心まめなる時は、谷の清水を汲て自炊く。こく／＼の雫を恣て、一爐の備へいこかろし。はた昔住けん人の誠に心高く住なし侍りて、たくみ置ける物すきもなし。持佛一間を隔て、夜の物をさむへき處なこいささかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何かしか嚴子にて、此たひ洛にのほりいまそかりけるを、ある人をして額をこふ。いこやす／＼筆を染て、幻住庵の三字をおくらる。頓て草庵の記念こなしぬ。すへて山居こいひ旅麻云、さる器たくはふへくもなし。木曾の檜笠、越の菅簍斗、枕の上の柱にかけたり。晝は稀／＼こふらふ人々に心を動し、あるは宮守の翁、里のをのこ共入來りて、るのししの稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなこ、我聞しらぬ農談、日既に山の端にかかれは、夜座靜に月を待ては影を伴ひ、灯を取ては罔兩に是非をこら

(六卷 養猿)

仕官懸命（しくわんけいめい）君に仕へて知行俸祿を願ふ也。佛籙祖室（ぶつりくそしつ）ぶつりそしつ。惠能語録に「吾三十而窺佛籙祖室」此一筋（このひとすぢ）風雅の道、即ち俳諧也。樂天（らくてん）白居易（はくいち）名は居易。老杜（らうと）杜甫（ふ）字は子美。

す。かくいへはこて、ひたふるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむこにはあらず。や、病身に倦て、世をいさひし人に似たり。情、年月の移こし拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たひは佛籙祖室の扉に入らんこせしも、たごりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかり事さへなれば、終に無能無才にして此一筋につなかる。樂天は五臟の神をやふり、老杜は瘦たり。賢愚文質のひこしからさるも、いつれか幻の栖（すゐ）ならずやこおもひ捨てふしぬ。

先たのむ椎の木もあり夏木立

(六卷養猿)

題芭蕉翁國分山幻住庵記之後

何世無隱士（なによなくん）以心隱（こころをかくる）爲賢也。何處無山川風景（どこにもなくさんせんふうけい）因（よ）人美也。間讀（まよ）芭蕉翁幻住庵

廻（すなはち）

纒（わづかに）

依稀（いき）

勝覽（しょうらん）名所と同一。

震軒（しんけん）向井氏元端、向震軒と號す、去來の兄也。

記乃識其賢且知山川得其人而益美矣。可謂人與山川共相得焉。迺作鄙章一篇歌之曰。

琵琶湖、南兮國分嶺、古松鬱兮綠陰清、  
茅屋竹椽纒數間、內有佳人獨養生、  
滿口錦繡輝山川、風景依稀入誹城、  
此地自古富勝覽、今日因君尙益榮、  
元祿庚午仲秋日

震軒具草

(六卷養猿)

几右日記

くつさめ(噓)

はらく時、鶏のみたれ啼をいふ也。

岩梨(いはなし)常の梨より花遅し。

おぶく(御佛餉)

時鳥背中見てやる麓かな  
 曲水くつさめのあま静也夏  
 の山野去来海山に五月雨  
 そふや一くらみ凡兆軒近  
 き岩梨折るな猿のあし  
 千凡山珍細脛ハキの休  
 め處や夏の山珍嶺  
 贈紙帳おもふ事紙帳に  
 かけき送りけり野徑  
 いつたきて落の葉にも  
 るおぶくそも里東  
 螢飛疊の上もこけの  
 露乙州

(六卷養猿)

たごくし(覺束なく不案内なるをいふ)

たかえ(抱)

顔カハセや葎の中の花うつきセ怒誰  
 たごくし峰に下駄はく五月闇探志  
 五羽六羽庵さりまはす閑古鳥元志  
 木つゝきにわたして明る水鶏哉セ泥土  
 笠あふつ柱涼しや風の色史邦  
 月待や海を尻目に夕すすみ正秀  
 しつかさは栗の葉沈む清水哉亡人柳陰  
 涼しさやさもに米かむ椎か本如行  
 訪に留主なり  
 椎の木をたかえて鳴や蟬の聲セ朴水  
 目の下や手洗ふ程に海涼しミノ垂井市隱  
 文に書こす

(六卷養猿)

麥の粉は鈔(はつたい)也。

一夏(いちげ)四月十五日を結夏、七月十五日を解夏として安居九十日をいふ、又夏百日をいふ(逆志抄)

膳所米や早苗のたけに夕涼半残

一袋これや鳥羽田のこまし麥之道

書音

一夏入る山さはかりや旅寐好長崎町

夕立や檜の臭かの一しきり及肩

昇ル猿腰掛

秋風や田の上山のくほみより尙白

贈箋

しら露もまたあら箋の行へかな北枝

木履ぬく傍に生けり蓼の花木節

色紙に書

こす(越す)縫によす也。

いんち(竈馬)

明年は元祿四年なるべし。

縫にこす薬袋や萩の露セ扇、

稻の花これを佛の土産哉智月

石山や行かてはたせし秋の風羽紅

桶の輪やきれて鳴やむきりくす昌房

里は今夕飯時のあつさかな何處

鳴やいこみ鹽にほこりのたまる迄越人

越人ミ同しく訪合て

蓮の實の共に飛入庵かな等哉

明年彌生尋舊庵

春兩やあらしも果す戸のひつみ嵐蘭

同夏

涼しさや此庵をさへ住捨し曾良

跋

首諫(しゆきやう)響に  
 同正風吟聲の義也。  
 倫衣 清正記に終南  
 山にて猿の袈裟を盗  
 み岩上に坐禪せるを見  
 て群猿これに効ひ坐  
 禪す。頂羽本紀に「楚  
 人沐猴而冠」  
 楫(はい)梅也。  
 狐腋白裘(こえきのは  
 くきう)古語に「千金  
 之裘非狐之腋也」  
 懂々(ごうごう)人のつ  
 らなり來る也。  
 昆仲(こんちゆう)昆は兄  
 也。仲は次也。同門の義  
 也。  
 施倪(ほうけい)婦女子  
 の義也。  
 叱(こき)時也。  
 兆來(てうらい)凡兆、  
 去來の二人也。

正竹(せいちく)北向雲  
 竹の門人也。

猿箕者芭蕉翁滑稽之首諫也。非比(スルニ)彼山寺偷(ヌスミ)衣朝市頂冠(ヲ)笑。只任(スル)心感(シ)物寫(ス)與  
 而已矣。洛下逸人凡兆去來隨(テ)翁遊學。楫館竹窓(コヘ)等凌(ラ)節斯有(レ)歲。屬撰(ニ)此集(ヲ)  
 玩弄(ク)無(レ)已。自謂(ラク)絶(テ)超(ツ)狐腋白裘(ヲ)者也。於是(チ)四方(ノ)噎友(ト)憧々(ト)往來。或(ハ)千里(ニ)寄(ル)書(ヲ)中  
 皆有(ニ)佳句(ヲ)。日(ニ)蘊(ル)月(ニ)隆(ル)各(ニ)程(ル)文章(ヲ)。然(レ)有(下)昆仲(ノ)驥士(ノ)不(ニ)集(ル)錄(ヲ)者(ト)索居(ク)竄(ル)柄(ヲ)爲(レ)難(シ)  
 通(シ)信(ヲ)。且(ハ)有(下)施倪(ノ)婦人(ノ)不(ニ)琢(ル)磨(ヲ)者(ト)龜言(ク)細語(ヲ)爲(レ)喜(シ)。同(レ)志(ト)雖(レ)無(レ)至(ル)其(ニ)域(ヲ)何(ニ)棄(ル)其  
 人(ニ)乎(ヲ)哉。果(シテ)分(ル)四(ノ)序(ヲ)作(ル)ニ(六)卷(ト)。故(レ)不(レ)違(ル)廣(ク)搜(ル)他(ノ)家(ノ)文(ノ)林(ヲ)也。維(レ)叱(ル)元(ノ)祿(ヲ)四(ノ)稔(ヲ)辛(ノ)未(ノ)仲  
 夏。余(ハ)掛(テ)錫(ヲ)於(テ)洛陽(ノ)旅(ノ)亭(ニ)偶(ニ)會(ル)兆(ト)來(ル)吟(ル)席(ニ)。見(レ)需(ト)下(レ)記(シ)此(ノ)事(ヲ)題(ク)書(ヲ)尾(ニ)卒(ニ)援(ル)毫(ヲ)不(レ)搯(ル)  
 拙。庶(ク)幾(ク)一(ニ)箋(ヲ)高(ク)張(ル)有(レ)補(ル)千(ノ)詞(ヲ)海(ノ)漁(人(ニ)云(フ))。

(六卷猿)

風狂野衲

丈草漢書

正竹書之

炭俵序

漢相如の文に「朝開(ニ)瓦  
 窓(ヲ)夕汲(ル)心泉(ヲ)」

莊子に「宋人有(ニ)善(ル)爲(ル)不(レ)龜(ル)手(ノ)之(ノ)藥(ヲ)者(ト)也」  
 煇(おき)炭(すす)の火(ヒ)起(ト)れる  
 也。

王維曰「詩有(ニ)聲(ヲ)畫(ヲ)畫(ヲ)無(レ)聲(ヲ)詩(ト)」  
 けたしくも(蓋(ス)斯(ル))  
 毛詩正義曰「名篇(ノ)之(ノ)例(ヲ)義(ヲ)無(レ)定(ル)準(ヲ)多(ク)不(レ)過(ル)五(ト)」

此集を撰める孤屋、野坡、利牛等は常に芭蕉の軒に行かよひ、瓦の窓をひらき心  
 の泉をくみしりて、十あまりな、の文字の野風をはけみあへる輩也。霜凍(コホ)り冬  
 こののあれまさる夜、この二三子庵に待て、火桶にけし炭をおこす。庵主是に口  
 をほさけ、宋人の手龜(カメ)らすこいへる藥是ならんこ、しのの折箸(オキ)に煇(おき)のささやかな  
 るを豎におき、横になほしつ、金屏の松の古さよ冬籠。舌よりまろひいつる  
 聲の、三人りか耳に入、ささくもうつる鵝の目鷹の目も是に魂のすわりたる。  
 けにや是を思ひ立、春の日ののつこ出しより、秋の月にかしらかたむけつ、やや  
 吟終り篇なりて、竟にあめつちの二卷にわかつこなん。是をひらき見るに有聲の  
 畫をあやまり、をさむれは又くぬき炭の筋見えたり。けたしくも題號をかく付侍  
 る事は、詩の正義にいへる五ツの品、あるはやまこの巻くのたくひにはあらね

(序俵炭)

元祿七年上方行脚の首途なるべし

定家の桐火桶によりて常に歌作れるをいふ。醉醒集に「ちきりあれやしらぬ深山のふしくぬき友さなりぬるねやのうつみ火」

ひ、けり(響)

ミ、例の口に任せたるにもあらず。竊により所ありつる事ならし。ひき日芭蕉旅行の首途に、やつかれか手を携へて再會の期を契り、かつ此等の集の事に及て、かの冬籠の夜桐火桶のもこにより、くぬき炭のふる歌をうちすしつるうつりに、炭たはらこいへるは誹也けり。獨こちたるを、小子間をりて、よしと思ひうるミや、此集をえらふ媒ご成にたり。この心もて、宜しう序書てよこ云捨てわかれぬ。今此事をかうかへ、其初をおもふに、題號おのつからひ、けり。さらに辨をつくる境にはあらしかしミ、口をつくむ。

元祿七の年夏閏さつき初三の日

素龍書

(序 俵 炭)

炭俵集上卷

米の直(こめのね)米の相場の高さ也。

御頭(おかしら)小祿の士の組頭をさしていへる也。

つら(列)

梅か香にのつミ日の出る山路かな 芭蕉  
處く に 雉子の鳴たつ 野 坡  
家普請を春の手透にミり付て 同  
上のたよりにあかる米の直 蕉  
宵の内はらくミせし月の雲 同  
藪越しはなす秋のさひしき 坡  
御頭へ菊もらはるるめいわくさ 同  
娘を堅う人にあはせぬ 蕉  
奈良通ひ同しつらなる細基手 坡  
今年は雨のふらぬ 六月 蕉

(卷上 俵 炭)

御袋(おふくろ)母親の

こんにやく(蒟蒻)

居合(あい)林崎重信の發明せる劍術の一派也。

壬生(みぶ)京、壬生寺三月十四日より廿四日に至る間、念佛踊を行ふ也。  
東風(こち)

左右(さう)たより、こり沙汰也。

十夜(じふや)十月五日より十日までの十夜、浄土宗にて行ふ法會也

表かへ(おもて替)疊のおもて替也。

牢人(らうにん)浪人也。牢は浪に通ずる慣用字也。

法印(ほういん)山伏也

未進(みしん)年貢の納め残り。

預けたる味噌取に遣る向河岸  
ひたさしいひ出す御袋の事  
終宵尼の持病を押へける  
こんにやくはかり残る名月  
初雁に乗懸下地敷て見る  
露を相手に居合ひさぬき  
町衆のつらりさ酔て花の蔭  
門て押る、壬生の念佛  
東風かせに糞のいきれを吹まはし  
た、居るままに肱わつらふ  
江戸の左右向ひの亭主登られて  
こちにもいれぎから白をかす

坡 蕉 坡 同 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡

(卷上俵炭)

方くに十夜の内のかねの音  
桐の木高く月冴るなり  
門しめてたまつて寐たる面白さ  
ひろうた金て表かへする  
初午に女房のおやこ振舞て  
又此春もすまぬ牢人  
法印の湯治を送る花さかり  
繩手を下りて青夢の出来  
この家も東の方に窓をあけ  
魚に喰あく濱の雑炊  
千鳥鳴一夜くに寒うなり  
未進の高のはてぬ算用

蕉 坡 蕉 同 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉

(卷上俵炭)



隣へもしらせす嫁をつれて来て  
屏風のかけに見ゆる菓子盆

蕉 坡

三吟

兼好も蒔織けり花さかり嵐  
あさみや苜に雀箱もる利  
片道は春の小坂のかたまりて野  
外をざまくに圍ふ相撲場  
細くさ朔日ころの宵の月  
早稲も晩稲も相生に出る  
泥染をなかき流れにのはすらん

雪 坡 牛 雪 坡 牛 雪 坡 牛 雪 坡 牛

兼好(けんこう)徒然草の作者、攝津安部野に住て弟子寂閑らとて京やうの物をしらへて京の便りに商れける也。いふ俗説によれる也。あさみ(苜)苜(ちぢさ)の意也。俗にたゞくさ

泥染(ごろごめ)田野の赤澁の水にて染る也。

節々(せつせつ)頻りに也。かひわり(貝割)豆のもやし也。

綱ぬき 革にて作れる雪沓也。いぼ(疣)

雑役(ざうやく)牝馬也

あちこちすれは晝の鐘うつ  
隣から節々嫁を呼に來る  
てふくしくも譽るかひわり  
黒谷の口は岡崎聖護院  
五百のかけを二度にこりけり  
綱ぬきのいほの跡ある雪のうへ  
人のさはらぬ松黒むなり  
雑役の鞍を下せは日か暮て  
飯の中なる芋を堀る月  
漸こ雨降やみて秋の風  
雞頭見てはまた躰かく  
奉公のくるしき顔に墨ぬりて

雪 坡 牛 雪 坡 牛 雪 坡 牛 雪 坡 牛 雪 坡 牛

河内にて作る鍋の送り  
荷をいへるか(大鏡)

囉はぬ(もらはぬ)

かわいい(界限)

喧嘩に強きこの弟、劔  
術に秀てたる故に召抱  
にあひたるにや(婆心  
録)

抱上る子の小便をする  
くわたく河内の荷物送りかけ  
心見らるる箸のせんたく  
婿か来て娘の世さは成にけり  
今年の暮は何も囉はぬ  
金佛の細き御足をさするらん  
此かかわいいの小鳥皆よる  
黍の穂は残らす風に吹倒れ  
馬場の喧嘩の跡にすむ月  
弟はさうく江戸て人になる  
今に庄屋の口はほこけす  
賣手からうつて見せたるたたき鉦

牛 坡 雪 牛 坡 雪 牛 坡 雪 牛 坡 雪 牛 坡 雪

雪のあひ間に、使ひを  
はしらする體也。

かび(饅)

溝川(みぞかは)

上張(うはり)着衣の  
上に假にきるもの也。

ひらりくく雪のふり出し  
鎌倉のたより聞せに走らす  
かした處のしれぬ細引  
獨ある母をすゝめて花の蔭  
またかび残る正月の餅

牛 坡 雪 牛 坡 雪 牛 坡 雪

ふか川にまかりて

空豆の花咲にけり麥の縁  
畫の水鶏のはしる溝川  
上張を通さぬ程の雨降て  
そつと覗けは酒の最中

屋 蕉 水 牛 利

僧都(さうづ)職原抄に  
準ニ四位殿上人ニ有ニ大  
少正權四分ニ

よくなりて 食慾の進  
むこと。

さけて(下けて)安賣也

寐處に誰も寐てるぬ宵の月  
きたりさ塀のころふ秋かせ  
きりくす薪の下より鳴出して  
晩の仕事の工夫する也  
妹をよい所からもらはる、  
僧都のもこへ先文をやる  
風細う夜明鳥の鳴わたり  
家のなかれたあこを見に行  
鮎汁若い者よりよくなりて  
茶の買置をさけて賣出す  
此春はさうやら花の静なる  
かれし柳を今にをしみて

水 牛 屋 蕉 牛 水 蕉 屋 水 牛 屋 蕉

はがし(剝)

はつち(鉢)鉢坊主也

浅茅生(あさぢふ)

燭臺(しよくたい)蠟燭  
をさし立てるもの、燭  
架。

雪の跡吹はかしたる朧月  
ふさん丸けてものおもひるる  
不届な隣さ中の悪うなり  
はつち坊主を上へあからす  
泣事のひそかに出来し浅茅生に  
置わすれたるかねを尋る  
着の儘にすくんで寐れば汗をかき  
客を送りて提る燭臺  
今の間に雪の厚さを指サて見る  
年貢濟たさほめられにけり  
息災に祖父の白髪のめてたさよ  
堪忍ならぬ七夕の照り

水 牛 屋 蕉 牛 水 蕉 屋 水 牛 屋 蕉



辨(べん)辨官也。十二  
三は只に大敷を云へる  
のみか(標註)

うらの詞(裏のこは)  
行くを行かず、見るを  
見ずなごいふ東近江の  
方言(標註)

ひしこ(鯉)

御影供(みえいく)三月  
十一日、弘法の忌日也。  
いほひ出 灸の跡のた  
づれて腫物となる也。

舞羽(まひは)粕繰「か  
せくり」といふ糸掛也

瘡日(おこりび)日を隔  
て、起る熱病也。

すいき(芋莢)芋の莖也  
こつてい(特牛)頭の大  
いなる牛の事也。

十二三辨の衣裳の打揃ひ  
本堂はしる音はさろく  
日のあたる方はあからむ竹の色  
只奇麗さに口そそく水  
近江路のうらの詞を聞初て  
天氣の相よ三日月の照り  
生いなから直に打こむひしこ漬  
椋の實落る屋根くさる也  
帶賣の戻り連たつ花くもり  
御影供頃の人のそはつく  
ニオほかく二日灸のいほひ出  
ほろくあへの膳にこほるる

牛 屋 坡 牛 屋 坡 牛 屋 坡 牛 屋 坡 牛 屋 坡 牛

(卷上俵炭)

ない袖を振て見するも物思ひ

舞羽の糸も手につかす繰

段ぐに西國武士の荷のつこひ

尙きのふよりけふは大早アサ

切き蛭の喰倒したる植たはこ

くはり納豆を仕込廣庭

瘡日をまきらかせこも待こころ

藤てすけたる下駄の重たき

つれあひの名をいやしけに呼廻り

隣のうらの遠き井の本

暮の月横に負來る古柱

すいきの長のあまるこつてひ

牛 屋 坡 牛 屋 坡 牛 屋 坡 牛 屋 坡 牛 屋 坡 牛

(卷上俵炭)

暇(もみ)

師走比丘尼(しはすびくに)旅かせぎの賣女也。

天満(てんま)大阪。

尻手(しりて)

ニウひつそりみ盆は過たる浄土寺

戸でからくみし居風呂の屋根

伐り透す椽ミ檜のすれあひて

赤い小宮は新らしきうち

濱迄は宿の男の荷をかゝえ

師走比丘尼の諷の寒さよ

餅搗の臼をさしく買かへて

天満の状を又わすれけり

廣袖をうへに引張る船の者

むく起にして参る観音

燃しさる薪を尻手にさしくへて

十四五兩のふりまはしする

牛 坡 屋 牛 坡 屋 牛 坡 屋 牛 坡 屋 牛 坡 屋

(卷上俵炭)

かきわけ城(保障土城)石垣なごもなき小城也海雲(もづく)海草也。

頼政の筆(よしまさのふで)晋風曰、士龍除けの爲め畑中に「頼政公の御領地」を記して建て置くをいふと父錦風の説也。

妓王寺(きわうじ)嵯峨小倉山の麓、二尊は釋迦彌陀也(大鏡)は見物客か。

月花にかきわけ城の跡斗

弦打風海雲こる桶

ミヲ機嫌能かひこは庭に起かかり

小晝のころの空しつか也

椽端に腫たる足を投出して

鍋の鑄かけを念入て見る

麥畑の替地に渡る榜示杭

賣手もしらす頼政の筆

物毎も子持になれはだゝくさに

又御局の古着いたたく

妓王寺のうへに上れは二尊院

けふはけんかく寂しかりけり

牛 坡 屋 牛 坡 屋 牛 坡 屋 牛 坡 屋 牛 坡 屋 牛 坡 屋

(卷上俵炭)

なめす、き(滑菴)榎茸也。

龍田川(たつたかは)名所をいふにあらず染模様也。

さんざ(爆竹)

薄雪のこまかに初手を降出し

ひみつくなりに鱈の雲腸

錢さしに菰引ちきる朝の月

なめす、きこる裏の塀あはひ

ミウ目を縫て無理に鳴する鴝の聲

又たのみして美濃たよりきく

か、さすに中の己の日を祭る也

入來る人に味噌豆を出す

筋違ひに木綿裕の龍田川

御茶屋の見ゆる宿のさりつき

ほやく、きさんざほこらす雲ちきれ

水菜に鯨まじる惣汁

牛屋坡 牛屋坡 牛屋坡 牛屋坡 牛屋坡 牛屋坡 牛屋坡

榎原(かたきはら)京の七條通り丹波口也(大鏡)

つそく時 薄暮也。

菩提達磨の九年面壁より云へるか。

濕(しつ) 皮膚病也。

花の内引越して居る 榎原

尻輕にする返事聞よく

落か、るうそく時の雨の音

入舟つ、く月の六月

拭立て御上の敷居ひからする

尚言つのである詞からかひ

名大水のあけくに畑の砂のけて

何年菩提しれぬ柝の木

敷金に弓同心の跡を繼

丸九十日濕をわつらふ

投打も腹立ま、にめつた也

足なし碁盤よう借に來る

牛屋坡 牛屋坡 牛屋坡 牛屋坡 牛屋坡 牛屋坡 牛屋坡

朔日しま(ついたちしま)朔日(たてら)云ふ方言(婆心録)精進箸(いもいばし)うんじ(慍)

定免(でうめん)年貢の定り也。

暑病(あつやみ)

里離れ順禮引のぶらつきて  
和らかものを姫の襟もこ  
氣にかかる朔日しまの精進箸  
うんじ果たる八專のそら  
丁寧(ていねい)に仙臺(せんたい)俵(わた)の口(くち)かゝり  
訴訟(そつご)か濟(す)て土手(どて)になる筋  
夕月(ゆげ)に醫者(いしや)の名字(なづな)を聞(き)はつり  
包(た)て戻(も)る鮭(さけ)のやきもの  
名(な)定(ぢやう)免(めん)を今年(ことし)の風(かぜ)に欲(ほ)りて  
もはや仕事(しごと)もならぬおそろへ  
暑病(あつやみ)の殊(こと)に土用(どよう)をうるさかり  
幾(いく)月(げつ)ぶりて越(こ)える逢坂(おうさか)坂  
牛屋(うしや) 牛屋(うしや) 牛屋(うしや) 牛屋(うしや) 牛屋(うしや) 牛屋(うしや) 牛屋(うしや) 牛屋(うしや)

門(もん)町締(ちぢ)りの門也

まいら戸(真平戸)表に横木の棧(か)を打(う)てる戸也。

春の部發句

立春

減(へ)もせぬ鍛冶屋(かじや)の見世(みよ)の店(みせ)さらし  
門(もん)ン建(た)直(ぢやう)す町(まち)の相(あ)談(だん)  
彼岸(ひがん)過(こ)一重(いちじゆう)の花(はな)の咲(さ)立(た)て  
三人(さんにん)なからおもしろき春(はる)執(しつ)筆(ひつ)  
牛屋(うしや) 牛屋(うしや) 牛屋(うしや) 牛屋(うしや) 牛屋(うしや) 牛屋(うしや) 牛屋(うしや) 牛屋(うしや)  
蓬萊(ほうらい)に聞(き)は伊勢(いせ)の初(はつ)便(べん)芭(ば)蕉(せう)  
東雲(とうぐも)やまいら戸(まいらど)はつすかさり松(まつ)濁(じやく)子(こ)  
みちのくのけふ關越(せきえつ)ん管(くだ)の海老(えび)老(ら)杉(すぎ)風(かぜ)



平家物語に「暖になり候へは草の深きに臥んこて播磨の鹿は丹波に越し」

かき(柿袴)柿色の小袴  
喰つみ 年賀客をもて  
なす重詰也

中の詞(ちうのこごは)  
莖立(くち)たち 野菜の  
さうの立てる也 古歌  
に「春の野のくちたち  
さならは我戀はみやこ  
の妹につまれもやせ  
ん」(大鏡)

徒然草に「京極入道は  
一重の梅を軒近く植は  
れたり」

春や祝ふ丹波の鹿も歸るこて  
刀さす供もつれたし今朝の春  
いそかしき春を雀のかき袴  
喰つみや木曾の匂ひの檜もの  
猶いきれ門徒坊主の水祝ひ  
目下にも中の詞や年の時宜  
初日影我莖立こつまればや  
長松か親の名て來る御慶かな  
梅 梅 一木つれく草の姿かな  
うめ咲や白の挽木のよき曲り  
梅か香の筋に立よる初日かな  
支考

(卷上俵炭)

日の射して糸の亂る、  
如き光りをいへり。

すまする(住する)住ま  
まはする(いへり)。

さはしる(飛沫)

窓のうちを見こみて

梅ちるや糸の光の日の匂ひ  
梅咲て湯殿の崩れ直しけり  
赤味噌の口を明けり梅の花  
みなくくに咲そろはねこ梅の花  
紅梅は娘すまする妻戸哉  
をなここもの、七くさはやすを見て  
さはしるも顔に匂へる薺かな  
七草や粧しかけて切刻み  
うちむれて若菜摘野に脛かゆし  
洛よりの文のはしに  
朧月一足つ、もわかれかな  
去來

(卷上俵炭)

三ヶ一は富士を見ての  
吟にや。  
古手賣(ふるてうり)古  
看屋也。

聲の文(こゑのあや)

大原やてふの出て舞  
臙月僧またはなされぬ頭巾かな  
仙花  
深川の會に

二七〇

長閑さや寒の名残も三ヶ一利  
十五日立や睡月の古手賣大サカ之  
野道牛  
猫の戀初手から鳴て哀也  
野角坡  
猫の子のくんつほくれつ小蝶哉  
其角  
鶯  
鶯にほうき息する朝かな嵐雪  
うくひすに薬をしへん聲の文  
其角  
鶯の聲に起行雀かな桃隣  
鶯や門はたま〜豆腐賣野坡

(卷上俵炭)

こねり(木練柿)

鄙の懷紙に「洛中」こ  
前書あり。

籬(ふみ)春にてモッコ  
也。

うくひすの一聲も念を入にけり  
利牛  
柳

こねりをもへらして植し柳哉  
湖春  
障子越し月のなひかす柳哉  
素龍  
五人扶持さりてしたるる柳哉  
野坡  
鶉鴿の尾は見付さるる柳哉  
一風  
町中へしたるる宿の柳かな  
利牛  
傘に押分見たるるやなき哉  
芭蕉  
椿  
土はこふ籬に散込椿かな  
孤屋  
枝長く伐らぬ習を椿かな  
湖春  
念入て冬からつほむ椿かな  
曲翠

(卷上俵炭)

二七一

鋸にからきめ見せて花つはき嵐雪  
鳥の音も絶へす家蔭の赤椿支考  
はき掃除してから椿散にけり野坡

花

うへのの花見にまかり侍りしに、人く幕打さわ  
き、ものの音にうたの聲もさまくなりにける。

かたはらの松蔭をたのみて

四ツごき(四ツ五器)佛  
家の行厨也。  
はつめぢか(初鉢)  
かう(頭)かみの音便也

四ツごきの揃はぬ花見こころ哉 芭蕉  
めつらしや内て花見のはつめぢか 杉風  
うかくこ来ては花見の留主居哉 丈草  
何かしのかうの殿の花見に侍りて  
中下もそれ相應の花見哉 素龍

男の子の抱かれながら  
喜ぶさまをいへり。

五元集に「折るに殺生  
偷盗あり」とあり。

花守や白きかしらを突あはせ去來  
勅めしの湯を片膝や庭の花 孤屋  
明日こいふ花見の宵のくらさ哉 荆口  
たかれてもをのここいきる花見哉 斜嶺  
柿の袈裟ゆすり直すや花の中 北枝  
牡丹すく人もや花見こはさくら 湖春  
あたなりこ花に五戒の櫻かな 其角  
花はよも毛むしにならし家櫻 嵐雪  
山さくらちるや小川の水車 大津尼智月  
老僧も袈裟かつきたる花見哉 大サカ之道  
誰母そ花に珠數くる遅さくら 祐甫  
山櫻小川飛越すをなこかな 越前福井全

昆布だし(こぶだし)昆  
布の煮出し汁也。

ふぶく(雪吹)

上巳(じやうみ)三月三  
日也。

二七四

昆布だしや花に氣のつく庫裏坊主利  
 おちつきは魚屋まかせや櫻かり同  
 折かへるさくらふくや臺所孤屋  
 祭まで遊ふ日なくて花見哉野坡  
 食の時皆あつまるや山さくら同  
 上巳  
 帶程に川のなかる、汐干かな沾  
 畫舟に乗るやふしみの桃の花桃隣  
 かつらきの神はいつれそ夜の雛其角  
 鬼の子に餅を居るも雛かな如行  
 日半路をてられて來るや桃の花野坡  
 麻の種毎年踏る桃の花利牛

(卷上俵炭)

したる(枝垂る)

ごみ(塵芥)

法度場(ほつごは)諸人  
の出入を禁したる處也

藪垣や馬の顔かく桃の花孤屋  
 青柳の泥にしたる、汐干哉芭蕉  
 題しらす

サカ田夫  
爲

瀧つほに命打込小鮎かな  
 春雨や蜂の集つたふ屋根の漏芭蕉  
 散残るつつしの薬や二三本子  
 ほそくこみ焼門の燕かな怒誰  
 鳥の行焼野の隅や風の末猿誰  
 氣相よき青葉の麥の嵐哉仙華  
 旅行にて

法度場の垣より内は董かな野坡

此集いまた半なる頃、孤屋旅立事ありけるに、品

二七五

(卷上俵炭)

さこ迄見送ることも、別  
れのつきざるを惜しむ  
也。

夫氣の好く晴れて、干  
物のかはきの早きをい  
へり。

川迄見送りて

雲霞ミこ迄行も同し事野  
梅さくらふた月斗別れけり利牛坡

夏の部發句

首夏

鹽魚の裏干す日也衣かへ嵐雪  
更衣十日はやくは花さかり野坡  
綿をぬく旅寐はせはし更衣九節  
雀よりやすき姿や衣かへ雪芝

芦毛(あしけ)馳にて色  
青白也(標註)  
かづらかけ(箱掛)桶の  
たが掛也。

棹のうた 船唄也。  
髭宗祇(ひげそうぎ)宗  
也。祇髭を愛したるを以て

花のあま今朝は餘程の茂り哉子珊  
扇屋の暖簾白し衣かへ利牛

卯花

卯の花やくらき柳の及越し芭蕉  
うの花の絶間たたかんの門去來

旅行に

卯の花に蘆毛の馬の夜明哉許六  
うの花に扣ありくやかつらかけ支考  
題しらす

棹のうたはやうら涼しめちか湖春  
髭宗祇池に蓮あるこころ哉素堂  
鶯や竹の子藪に老を鳴芭蕉

一二の橋(いちにのはし)伏見街道にあり。

柿寺(かきてら)美濃渥見郡立政寺、關ヶ原の役に家康に柿を献し其の名あり(大鏡)

郭公

聞まては二階にねたり子規  
桃隣 時鳥一二の橋の夜明かな其角  
行灯を月の夜にせん時鳥嵐雪  
桃灯の空に詮なし子規杉風  
木かくれて茶摘も聞や杜宇芭蕉  
青雲や舟なかし遣る時鳥素龍  
ほごさきす鳴く風が雨になる利牛  
子規顔の出されぬ格子かな野坡  
麥 柿寺に麥穂いやしや作こり荆<sup>ミ</sup>口  
麥の穂ご共にそよくや筑波山千川

二七八

(卷上俵炭)

芭蕉の留別に「麥の穂をたよりにつかむ別れかな」

小人形(こにんぎやう)元祿の頃紙にて小人形を作りて賣れり(標註) さうぶ(菖蒲)

粽(ちまき)

麥跡の田植や遅き螢時許六

翁の旅行を川崎迄送りて

刈込し麥の匂ひや宿の内利牛

おなし時に

麥畑や出ぬけても猶麥の中野坡

おなしころを

浦風やむらかる蠅の離れ際岱水

端午

五月雨や傘につけたる小人形其角

さうぶ懸て見はやさつきの風の色 大サカ 酒 堂

五日まで水澄かぬるあやめ哉 桃 隣

文もなく口上もなし粽五把 嵐 雪

二七九

(卷上俵炭)

みほのや(美保谷)平家物語にある美保谷の景清の鑑引也。首の骨の強きをいへる也。

並松(なみまつ)松並木也。

島田の塚本如舟方に逗留中、江戸へ便りありて、此句を送り越せりと編者の註なり。

菖陸(やまごけう)山牛房也。根を薬用とす。

川中の芭蕉の遺言状に「羽州岸本氏の發句、炭俵に紛入候、公羽と翁との違にて杉風より御断頼入候」とある發句の一にして芭蕉の作にあらず。またがる(跨)

杓(ひしやく)柄杓也

さい(雜魚)

みほのやは首の骨こそ甲なれ  
帷子の下ぬき懸る袷かな  
素龍

夏旅

並松を見かけて町の暑かな  
臥枯柴に晝顔あつし足の豆  
斜嶺二三番鶏は鳴きもあつさ哉  
長魯兎元山の力及はぬあつさかな  
猿雖駿河路や花橘も茶の匂ひ  
芭蕉

此句は島田よりの便に

五月雨

五月雨や隣へかける丸木橋  
素龍五月雨の色や淀川大和川  
桃隣

さみたれに小鮎を握る子供哉  
野坡

五月雨や露の葉にもる菖陸  
嵐蘭

此句は桃隣より書てこしぬ

五月雨や顔も枕もものの本岱  
水

涼

川中の根木によろこぶ涼みかな  
芭蕉

月影に動く夏木や葉の光り  
女可南

涼しさよ塀にまたかる竹の枝  
ナカサキ卯七

行灯をしひてきらする涼かな  
探芝

崎風はすくれて涼し五位の聲  
智月

す、しさをしれミ杓の雫かな  
備前兀峰

すすしさや浮洲の上のさこくらへ  
去來

夕涼みあふなき石にのほりけり野坡  
三日月のかけにて涼む哀かな素堂  
題しらす

定家机(ていかづくろ)  
脇息のなごきにて小さき机也(大鏡)  
慰斗(のし)鮑也。

橘や定家机のありまころ杉風  
慰斗むくや磯菜涼しき島かまへ正秀  
世の中や年貢島のけしの花里東  
早乙女にかへてこりたる菜飯哉嵐雪  
木曾路にて

山吹、巴、ともに義仲の妾也。

やまふきも巴も出る田植かな許六  
晝顔や雨降足らぬ花の顔智月  
はへ山や人もすさめぬ生くるみ北鯨  
曉の目をさまさせよ蓮の花乙州

はへ山(肥山)草木のあ  
る山なきを峠といふ。

水葵(みづあほひ)浮  
番(なき)也。夏秋紫花  
を開く(標註)

雨乞の雨氣こはかる借着哉丈草  
螢見し雨の夕や水葵仙花  
一いきれ蝶もうろつく若葉哉楚舟  
なりかかかる蟬から落す李哉残香  
猪の牙にもけたる茄子かな爲有  
團賣侍町のあつさ哉怒風  
けうごきは鶯の栖や雲の峰祐甫  
一枝はすけなき竹の若葉哉仙花  
竹の子や兒の齒くきの美しき嵐雪

(卷上俵炭)

あらし(阿刺吉)泡盛の  
上品也。あるじ(饗應)

さるへき人、僕か酒をたしなむ事を、かたく戒め  
給ひて諭さしむ。然るにある會にそれをよく知て、  
あらし泡盛なご名あるかきりを取て、あるしせ

(卷上俵炭)



これは酒にあらず、琉球の泡盛なれば、酔するに及ばずして、酔すられしを、吹て酒に名のつくこいへる也。

られければ汗をかきて

改て酒に名のつく暑かな利牛

ある人の別墅にいなはれ、盡日打和きて物語し

其夕つかた、外のかたをなかめ出して

行雲を寐て居て見るや夏坐しき野坡

初秋より晩秋への順序にて、分類す可きなれど、月を賞翫のあるじをさして、序次に拘はらざるをいへる也。

炭俵集下卷

秋 秋のあはれ、いつれかくの中に、月を翫て時候の序をえらはず。

名月

名月や見つめてもるぬ夜一よさ湖春

名月や椽さりまはす黍の虚去來

家買てこさし見初る月夜哉荷兮

名月や誰吹起す森の鳩酒堂

松蔭や生船揚に江の月見里東

もち汐の橋の低さよ今日の月利牛

家こほつ木立も寒し後の月其角

むさしの仲秋の月、初て見侍て望峰ノ不盡、筑波を

もち汐(望汐)大汐也。

望峰(ぼうほう)不二と筑波の相望を云へり。(標註)

不二は駿河の國なれば  
その町名のゆかりより  
殊によく見みるかさい  
へる也。

たらきび(唐黍)灯影の  
唐黍に映する也。

閉關の説、本朝文選に  
出づ。

名月や不二見ゆるか三駿河町素龍  
七夕

笹の葉に枕付てや星むかへ其角  
星合にもえたつ紅や蚊屋の縁孤屋  
たなはたやふりかはりたる天の川嵐雪

孟蘭盆

たうきひにかけらふ軒や玉祭り酒堂  
踊るへき程には酔て盆の月江李由  
盆の月寐たか三門をたたきけり野坡

朝顔

閉關

朝顔や晝は錠おろす門の垣芭蕉

(卷下俵炭)

日備(ひよう)日雇人足也。  
てしかな古歌に「梅  
か香を櫻の花にもたせ  
つ柳の枝にさかせて  
しかなのの語に利かせた  
かな」の語に利かせた  
る也。

まろろき(蟬)

躬恒形(みつねかた)古  
今集の作者大河内躬恒  
躬恒形の硯は鹿の足跡  
に似たり(標註)

(卷下俵炭)

朝かほや日備出て行跡の垣利合  
てしかな三朝顔ははす柳かな湖春  
秋虫  
年よれば聲はかる、そきりくす大智月  
悔いふ人のみきれやきりくす丈草  
蟻螂にくんて落たるぬかこ哉爲有  
こほろきや箸て追やる膳の上孤屋  
鹿  
友鹿の鳴を見かへる小鹿哉車來  
人のもごめによりて  
鹿のふむ跡や硯の躬恒形素龍  
旅行のとき

すかひ(背向)山家集に  
「したり咲く萩のふる  
えに風かけてすかひ  
く」にをじか鳴なり

端(はた)

鼻先の歌かるたを拾ふ  
やうに、女どもの争ひ  
て茸を採るをいへる  
也。

近江路やすかひに立る鹿の長土芳  
草花  
宮城野の萩や夏より秋の花桃隣  
花薄さらへちからや村雀野童  
片岡の萩や刈ほす稻の端猿雖  
芦の穂や顔撫上る夢ころ丈草  
難波津にて  
蘆の穂に箸うつ方や客の膳去來  
女中の茸狩を見て  
茸狩や鼻の先なる歌かるた其角  
園菊  
菊畑奥ある霧のくもり哉杉風

(卷下俵炭)

さちふく 含(フクム)雲(クモ)標  
註(綿の實の形を桃に  
形容せる也。  
南蠻(なんばん)豊公征  
韓の役に、唐(たう)辛(しん)子の種  
を獲たりとも傳へらる

おのが(己)

ふつゝか(不束)

紺菊も色に呼出す九日哉桃隣  
秋植物  
柿のなる本を子供の寄所利牛  
落栗や谷になかる、蟹の甲祐甫  
秋風や茄子の数のあらはる、木白  
箕に干て窓にミちふく綿の桃孤屋

たうからしの名を南蠻からしこいへるは、かれか  
治世南蠻にて久しかりしゆゑにや。未詳。ほうつ  
き天のそき、そらみ、八つなり、なこいへるはお  
のかかたちを、このめる人々のもて遊ひて付たる  
名なるへし。皆やさしからぬ名目(モウ)は、汝か生れ付  
のふつつかなれば、天資自然の理、さらく恨む

(卷下俵炭)

すりばち(摺鉢)  
つるべ(釣瓶)

ひんぼ樽(貧乏樽)  
みさかな(御肴) 催馬樂  
に「御肴に何よけん」

北野(きたの) 京の北野  
天満宮也。

へからす。かれか愛をうくるや。石臺にのせられ  
て、竹縁のはしのかたにあるは、上々の仕合也。  
こもすれは、すりばちのわれ、底ぬけのつるべに、  
土かはれて、屋根のはつれ、二階のつま、物干の日  
かけをたのめるなご、あやふく見え侍るを朝顔の  
はかなきたくひには、誰もく思はず。大かたは、  
かつら髭、つり鬚のますらをにかしつかれて、ひ  
んぼ樽の口をうつす、みさかなとなり、不食不菜  
のこき、ふみ取出され、多くはやつこ豆腐の頃、  
紅葉の色を見するを、榮花の頂上こせり。かくは  
いへこ、ある人北野まうての歸るまに、道のほこ  
りの、小童にこかね一兩くれて、なんちか青く

(卷下俵炭)

小序(せうじよ)

唐辛子の根ごこ引抜か  
る、最期の、いたまし  
きを哀れむ也。

いくち(黄蘗)

こひこつ實のりしを、所望せし事ありこいへは、  
いやしめらるへきにもあらず。しかしいまはその  
人くも此世をさりつれば、いよく愛をもたの  
むへからす。からきめも見すへからすこ小序をし  
かいふ。

石臺を終に根こきや唐辛子野坡  
題しらす

(卷下俵炭)

相撲取ならふや秋のからにしき嵐雪  
居風呂の下や案山子の身の終り丈草  
礎ひこりよき染物の匂ひ哉酒堂  
秋の暮いよくかるくなる身哉荷兮  
茸狩やいくちも兒は嬉し顔利合

敏行の歌に「秋來ぬこ  
目にはさやかに見えね  
さも風のおさにぞ驚か  
れぬる」

冬枯の。出羽岸本公羽  
の作也。猿舞師集、公羽  
文撰にて、公羽と翁の誤  
寫にて入集せる事見え  
たり

南宮山(なんぐうざん)  
美濃國の一宮也。  
社殿の檜皮(ひはだ)が  
風の吹き荒るゝに、す  
がる如く早ゆるより、  
風の根さいへるにて、  
檜の木根にはあら  
ず。

夕顔の汁は秋しる夜寒哉 支考  
來る秋は風斗てもなかりけり 北枝  
秋風に蝶やあふなき池の上 僧依々  
庖丁の片袖くらし月の雲 其角

冬の部

初冬

風や沖より寒き山のきれ 其角  
市中や木の葉もおちす不二嵐 桃隣  
冬枯の磯に今朝見るささか哉 芭蕉

南宮山に詣て

櫻木や菰張まはす冬かまへ 支梁  
蜘蛛の巢のきれ行冬や小松原 斜嶺  
刈蕎麥の跡の霜ふむす、め哉 桐奚  
風の藪にこゝまる小家かな 殘香  
初霜や猫の毛も立臺所 楚舟  
風や <sup>マタタキ</sup> 盼しけき猫の面 <sup>ツラ</sup> 八桑  
こからしの根にすかり付檜皮哉 桃隣  
箒目に霜の蘇鐵の寒さ哉 游刀  
時雨  
芋喰の腹へらしけり初時雨 荆口  
黒みけり沖の時雨の行まころ 丈草

芭蕉翁を我草屋に招きて

漏らぬ程今日は時雨よ草の庵斜嶺  
有明さなれば度々しくれかな許六

旅寐のころ

小夜時雨隣の白は挽やみぬ野坡

大根引さいふ事を

鞍壘に小坊主乗るや大根引芭蕉

鉢巻をこれば若衆そ大根引野坡

神送り荒たる宵の土大根酒堂

寒さを下の五文字にすゑて

人聲の夜半を過る寒さ哉野坡  
この頃は先挨拶も寒さかな示蜂

(卷下俵炭)

夫木集「ひさり寐を今  
は何にかなくさまん隣  
の笛も吹やみにけり」

神送り(かみおくり)十  
月朔日、神々の出雲に  
旅立つをいふ也。

蕎麥切(そばきれ)今  
略してソバさいふと同  
じ。

みそさい(三十三才)

飯道寺(はんたうじ)近  
江甲賀郡にあり。天台  
宗にて寺領二百石。

蕎麥切に吸ものもなき寒さ哉利牛  
足もこもしろけて寒し冬の月我眉  
魚店や蕙うち上て冬の月里東

右の二句は深川の庵へおまつれし頃、他國よりの状のは  
しに有つるを見て、今爰に出しぬ。

雪

初雪に隣を顔てをしへけり野坡  
初雪に見事や馬の鼻はしら利牛  
初雪や堀の崩れの蔦のうへ買山  
雪の日に庵かさうそみそさい依々  
雪の日や薄やうくもる寫しもの猿雖  
冬の夜、飯道寺にて

(卷下俵炭)

定家卿の逸事也。

曲突(へつゝい)「くさ」の  
事にて、竈(く)のうしろな  
る煙出し也。

御火燒(おほたき)十一  
月、神前に柴をたきて、  
打はやす京の神事也。

庚申(かうしん)その日  
を待ちて、徹夜する俗  
間信仰也。

手代(てだい)

元腹(けんぷく)元服  
也。

宗長の歌に「くりかへ  
し同じ事のみ老ぬれば  
賤がをたまきく」

杉のはの雪 隴也 夜の鶴 支考  
 朱の鞍や佐野へ渡りの雪の駒 北枝  
 はつ雪や先馬屋から消そむる 許六  
 炭賣の横丁さかる雪吹哉 湖夕  
 海山の鳥鳴立る雪吹かな 乙州  
 江の船や曲突(へつゝい)にこまる雪の鷺 素龍  
 題不知  
 かなしさの胸に打こむ枯野哉 羽黒(うろく)人丸  
 寒菊や粉糠のかかる白の端 芭蕉  
 禪門の革足袋おろす十夜哉 許六  
 御火燒のもりものこるな村からす 智月  
 白魚の白き匂ひや杉の箸 之道

(卷下俵炭)

楯の火や曉かたの五六尺 丈草  
 庚申やこゝに火燧のある座敷 残香  
 誰み誰か縁組 濟て里神樂 其角  
 海へふる瓦や雲に波のおこ 同

煤掃は己か棚つる大工かな 芭蕉  
 すす拂障子をはくは手代哉 万乎  
 餅搗や元腹さする草履取 野坡  
 山伏の見事に出たつしはす哉 嵐雪  
 待春や氷にまします塵あくた 智月  
 歳暮  
 此暮もまたくりかへしおなし事 杉風

(卷下俵炭)

なじませ(馴染せ)也。  
標註に「なしよせ(濟寄  
せ)か」とあれど聞えず。

いかゞ(如何)

尾上(をのへ)山頂也。

四扉(よさびら)善光寺  
也。芭蕉の句に「月かけ  
や四門四宗も只一つし  
婆心録は「よつあし」を  
訓めり。

雀亂(くわくらん)夏日  
俄に吐瀉する急病也。

袴着ぬ聳入もありさしの暮 李 由  
 なしませて鶯一羽さしの暮 智 月  
 鍋ふたのけばくしさよ年の暮 孤 屋  
 年の夜は豆はしらかす俵かな 猿 雖  
 年の暮 互タガヒにこそすき 錢遣ひ 野 坡  
 芭蕉よりの文に、くれの事いかゝ、なご有し其か  
 へりいひに  
 爪取て心やさしや年こもり 素 龍  
 行年よ京へさならは状ひみつ 湖 春

(卷下俵炭)

秋の部

秋の空尾上の杉に離れたり 其 角  
 おくれて一羽海わたる鷹 孤 屋  
 朝霧に日備揃る貝吹て 同 同  
 月のかくるる四扉の門 角 同  
 祖父か手の火桶も落す斗也 同 同  
 つたひ道には丸太ころはす 屋 同  
 下京は宇治の糞船さしつれて 同 屋  
 坊主の着たる簀はをかしき 角 同  
 足輕の子守して居る八ッ下り 屋 屋  
 息ふきかへす雀亂の針 角 角  
 田の畔畔に早苗把タテて捨て置 屋 屋  
 道者のはさむ編笠の節 角 角

(卷下俵炭)



鈴繩(すずなわ)鱒の脈  
繩にて、水中の上り下  
りを知る爲め也。  
下(おり)  
大井川行幸記(貫之)に  
「月の桂のこなた春の  
梅津よりみふねよそひ  
て」

宮(みや)近江高宮也。

ぶこ(蝸)

あはた(痘癩)

三〇〇

行燈の引出しさかすはした錢  
顔に物着てうた、寐の月  
鈴繩に鮭のさはれはひひく也  
雁の下たる筏なかる、  
貫之の梅津桂の花もみち  
むかしの子ありしのはせて置  
いざ心あこなき金のつかひ道  
宮の縮のあたらしきうち  
夏草のぶこにさされてやつれけり  
あはたさいへは小僧いやかる  
年の豆蜜柑の核も落ちりて  
帯さきなから居風呂を待  
屋 角 屋 角 屋 同 角 屋 角 屋 角 屋

(卷下俵炭)

説教淨瑠璃の双紙に  
「をくり判官」こいふ萬  
治年間の印本あり(標  
註)

君來ねはこはれ次第の家さなり  
稗・ミ塩ミの片荷つる籠  
辛崎へ雀のこもる秋のくれ  
北より冷る月の雲行  
紙燭して尋て來たり酒の残  
上塗なしに張ておく壁  
小栗よむ片言ませて哀也  
けふもたらつく浮前の船  
孤屋旅立事出來て、洛へのほりけるゆゑに、今四句未滿  
にして吟終りぬ。  
屋 角 屋 角 屋 角 屋 角

(俵炭卷下)

大野氏(あまのし)桃隣也。

天野氏興行

道くたり拾ひあつめて案山子哉 桃  
 ぎんミ、水の落る秋かせ 野  
 入月に夜はほんのりミ打明て 利  
 堀の外まで桐のひろかる 牛  
 銅壺よりなまぬる汲て遣ふ也 隣  
 つよう降たる雨のついやむ 牛  
 瓜の花是からなんほ手にかかる 坡  
 近くに居れミ長谷をまた見ぬ 隣  
 年よりたものを常住ねめまはし 牛  
 いつより寒い十月のそら 坡  
 臺所けふは奇麗に掃立て 隣

(俵炭卷下)

長谷(はせ)長谷寺、北九里に駒野村あり、瓜の名所也。

銅壺(どうこん)

ほんなり、紅うこんのほんのり染りたる也。

より平 織物也。

身體(しんたい)「身代」也。

分にならるる娘の仕合 牛  
 ほんなりミ細工に染る紅うこん 隣  
 鏡持はかり戻る夕月 坡  
 時ならず念佛聞ゆる盆の内 牛  
 鳴真黒に來て遊ふ也 隣  
 人のもの負ねは樂な花こころ 牛  
 もはや彌生も十五日たつ 坡  
 より平の機に火桶はさり置て 隣  
 むかひの小言誰も見廻す 牛  
 買込た米て身體たまるる 坡  
 歸るけしきか乙鳥さわつく 隣  
 此度の薬はき、し秋の露 牛

(卷下俵炭)



ひたるき (空腹) ひも  
じきこと。

籠挑灯 (かごてうちん)  
籠に紙を貼て用ゆる挑  
灯也。  
肩癖 (けんへき) 肩壁也

餓鬼 (がき) 島人の異形  
を云り (標註)

帯し (おびし) 腰間也。

産 (よろこぶ) 子供の生  
れたる也。

いらひ (借) 借り合ふこ  
と。

鯉を獲る鈴繩也。

ひたるきは殊に軍の大事也  
泡氣の雪に雑談もせぬ  
明しらむ籠挑灯を吹消して  
肩癖にはる湯屋の膏藥  
上おきの千葉きさむもうはの空  
馬に出ぬ日は内て戀する  
紮買のセツ下りを音つれて  
堀に門ある五十石取  
此島の餓鬼も手をする月さ花  
砂にぬくみのうつる青草  
新島の糞も落つく雪のうへ  
吹こられたる笠こりに行

蕉 屋 坡 牛 蕉 屋 牛 蕉 屋 牛 蕉 屋 牛 蕉 屋 牛 蕉 屋 牛

川越の帯しの水をあふなかり

平地の寺の薄き藪垣

干物を日向のかたへるさらせて

塩出す鴨の苞ほこくなり

算用に浮世を立る京住居

又沙汰なしにむすめ産

またくささ大晦日も四ツの鐘

無筆のたのむ状の跡さき

中よくて傍輩合の借いらひ

壁をたたきて寐せぬ夕月

風止みて秋の鷗の尻さかり

鯉の鳴子の綱をひかへる

蕉 屋 坡 牛 蕉 屋 牛 蕉 屋 牛 蕉 屋 牛 蕉 屋 牛 蕉 屋 牛

ねちみやく(涅槃)

輪炭(わすみ)春は胴炭にかへて茶事に用ふる也(婆心録)

ちらほろミ米の揚場の行戻り

目黒参りの連のねちみやく

ごこもかも花の三月中時分

輪炭のちりを拂ふ春風

三〇八

牛屋坡蕉

雪の松をれ口見れは尙寒し

日の出る前の赤きふゆ空

下肴を一舟濱に打明て芭

あひたさきる、大名の供子

身にあたる風もふはく薄月夜

粟をかかられて廣き畑地利

(卷下俵炭)

牛屋坡蕉

芭蕉

子珊

夜桃

地利牛

熊谷(くまがい)中仙道の一驛也。

稻株の茂る也。

手前者(てまへもの)中國西國にて分限者をいふ也。

きはつく(際付)汚れる也。

熊谷の堤きれたる秋の水岱

管こしらへて鏗節賣る野

二三疊寐所もらふ門の脇

馬の荷物のさはる干もの沾

竹の皮雪踏にかへる夏の來て

稻に子のさす雨のはらく杉

手前者のひさりも見へぬ浦の秋

めつたに風邪のはやる盆過利

宵くの月をかこちて旅大工依

背中へのほる子をかはゆかる

茶筵のきはつく上に花ちりて

川から直に小鮎いらする

三〇九

水岱野坡菊圃珊坡風合々隣珊菊

(卷下俵炭)

精進日(いもひび)

わせて 來りて也。

雪舟(せつしう)名は寺揚、雲谷寺に住す、永正二年寂。畫聖也。

朝曇はれて氣味よき雉子の聲  
 背戸へ廻れは山へ行みち  
 物おもひ只うつく親かゝり  
 取集めては多き精進日會  
 餅米を搗て俵へはかり込  
 わさくわせて藥代の禮  
 雪舟てなくはミ自慢こきちらし  
 隣へ行て火をこりて來る  
 又今朝も佛の飯て埒をあけ  
 損はかりしてかしこ顔也  
 大阪の人にすれたる冬の月  
 酒をこまれは祖母の氣に入

風 水 屋 良 隣 依 圃 珊 牛 風 合 坡

(卷下俵炭)

御前(おまへ)一向宗にて佛壇をいふ也。  
つ(唾)

蓬(よもぎ)草餅につま込む料也。

す、けぬる御前の箔のはけかかり  
 次の小部屋てつにむせる聲  
 約束にかゝみて居れば蚊に喰れ  
 七ツのかねに駕籠呼に來る  
 花の雨あらそふうちに降出して  
 男ましりに蓬そろへる

珊 牛 良 風 隣 水

(卷下俵炭)

撰者芭蕉門人

志太氏

野 坡

小泉氏

孤 屋

元祿七歲次甲戌六月廿八日

池田氏  
利牛

三二

(卷下俵炭)

續猿蓑集卷之上

花は櫻、聽雨撰に「春  
の雨いさしつかに降て  
やかて晴たる頃、近き  
あたりに、春雨よらに行け  
る中に、春雨きよらかな  
る中、みしたよりいま  
たをやみなれば、こ前  
文あり。

狗背(ぜんまい)

煤(すす)煤掃のこと。

八	九	間	空	て	雨	降	柳	か	な	芭
春	の	か	ら	す	の	晶	ほ	る	聲	沾
初	荷	さ	る	馬	士	も	こ	の	み	の
内	は	さ	さ	つ	く	晚	の	ふ	る	ま
き	の	ふ	か	ら	日	和	か	た	ま	る
狗	背	か	れ	て	肌	寒	う	な	る	色
溢	柿	も	こ	こ	し	は	風	に	ふ	か
孫	か	跡	ぎ	る	祖	父	の	借	錢	り
脇	差	に	替	て	ほ	し	か	る	旅	刀
煤	を	し	ま	へ	は	は	や	餅	の	段

里 馬 沾 芭  
沾 蕉 菟 里 蕉 沾 圃 菟 圃 蕉

三三

(上卷猿蓑續)

一提(ひつぎけ)

たてあひ(立合)有明  
月と花との風情を競ふ  
也。

春無盡(はるむじん)月  
戀をなして、クジ引に  
て其の融通を受くる頼  
母子(たのもし)のこ  
さ也。

小擧(こあげ)

約束の小鳥 一提賣に來て  
十里あまりの餘所へ出かゝり  
笹の葉に小路埋ておもしろき  
あたまうつなき門の書つけ  
いつくへか後は汰沙なき甥坊主  
やつと聞出す京の道つれ  
有明におくる、花のたてあひて  
見事に揃ふ粉のはえ口  
春無盡まつ落札か作太夫  
伊勢の下向にべつたり逢  
長持に小擧の仲間そはくこ  
くわらりき空の晴る青雲

蕉 沾 里 菟 沾 蕉 菟 里 蕉 沾 里 蕉

(上卷養猿續)

貫穴(ぬきあな)けやき  
の角(かく)の堅くて、  
穴を穿ちがたき也。

伴僧(はんそう)駕(の  
りもの)

長刀坂(ながなたざか)  
黒谷より眞如堂に出る  
山の境にて嶮岨也(婆  
心録)

たをやか(嬋娟)

禪寺に一日あそぶ砂のうへ  
楓の角のはてぬ貫穴  
濱出しの牛に依をはこふ也  
なれぬ姫にはかくす内證  
月待に傍輩衆のうち揃ひ  
籬の菊の名乗さまく  
むれて來て栗も榎もむくの聲  
伴僧はしる駕のわき  
削やうに長刀坂の冬の風  
まふたに星のこほれかかれる  
引立て無理に舞するたをやかさ  
そつと火入に落す<sup>タヤカ</sup>蕉

蕉 沾 里 菟 沾 蕉 菟 里 蕉 沾 里 蕉

(上卷養猿續)



雀の字(からのじ)小雀  
山雀、日雀、四十雀、  
五十雀など也(婆心録)

ふつ／＼ 甘酒の沸く  
形容也。

見をこなひ(見損ひ)に  
せ銀を掴まされしをい  
ふ也。

花ははや残らぬ春のたゞくれて  
瀬かしらのほる陽炎の水  
里 菟

雀の字や揃うて渡る鳥の聲 馬  
てり葉の岸のおもしろき月 沾  
立家を買てはひれは秋暮て 里  
ふつ／＼なるを覗く甘酒  
霜氣たる蕪くふ子供五六人  
庭を敷て外の洗足  
悔しさはけふの一步の見そこなひ  
請狀すんで奉公ふりする  
沾 菟 里 沾 菟 圃 圃 菟

(上卷養猿續)

有ふり(ある振)金の有  
る振り也。

伊勢の望一が息子の嫁  
取りし時「我庵は花の  
心の移りけに昨日の秋  
ま住かはりけり」

梁纏(そめかせ)

よすきたる茶前の天氣きつかはし  
有ふりしたる國方の客  
何事もなくてめてたき駒迎  
風にたすかる早稻の穂の月  
臺所秋の住居に住かへて  
座頭のむすこ女房呼けり  
明はつる伊勢の辛洲の年籠り  
蓑はしらみのわかぬ一徳  
俵米もしめりて重き花盛  
春しつかなる竿の染纏  
鶯の路には雪を掃残し  
しなぬ合點て煩うて居る  
里 菟 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟 沾 菟 里 沾 菟 沾 菟 沾 菟 沾 菟

(上卷養猿續)



智恩院(ちおんゐん)京  
都東山淨土宗惣本山也

目利(めき)鑑定家の  
こと。

伊駒(いこま)大和平  
群郡。

智恩院の替りの噂極りて  
さくらの後は楓わかやく  
俎の鱸に水をかけ流し  
目利て家はよい暮しなり  
状箱を駿河の飛脚請取て  
また七ツにはならぬ日の影  
草の葉にくほみの水の澄ちきり  
伊駒氣遣ふ綿ごりの雨  
うき旅は鴉みつれ立渡り鳥  
有明高う明はつるそら  
柴舟の花の中よりつつこ出て  
柳の傍へ門をたてけり

里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟

(上巻養猿續)

こまめ(鱒)田作こも  
いふ。

絡線(きす)響蟲に似て  
ギスくさ鳴く虫也。

突目(つきめ)ものに  
突かれて傷ける眼の時  
時痛みの起る也。  
仰(けふ)仰山也。

百姓になりて世間も長閑さよ  
こまめを膳にあらめ片菜  
賣物の溢紙つゝみおろし置  
けふの暑さはそよりこもせぬ  
砂を這ふ棘の中の絡線の聲  
別を人か云出せは泣  
火燧の火いけて勝手をしつまらせ  
一石ふみし碓の米  
折くは突目の起る天氣相  
仰に加減の違ふ夜寒さ  
月かけにこさし烟草を吸て見る  
おもひのままに早稻て屋根葺

里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟

(上巻養猿續)

手拂(てはらひ)むすめ  
を嫁にやつて一人も残  
らぬ也。

不猫蛇、越人撰に此花  
の句、支考の竄入なり  
と云へり。

少う(すくなう)

續猿蓑の題號は此句に  
基くを以て、巻頭に  
出すべしとの説あり(標  
註)

手拂に娘をやつて娘のさた  
參宮の衆をこちて仕立る  
花のあさつつしの方かおもしろい  
寺のひけたる山際の春  
冬よりは少う成りし池の鴨  
一雨降てあたゝかな風  
里沾菟

(上卷猿蓑續)

猿蓑にもれたる霜の松露哉  
日は寒けれと静なる岡芭  
水かる、池の中より道ありて  
篠竹ましる柴をいたたく  
惟然

見世(みせ)店也、早仕  
舞ひをする也。

につ(莞爾)につさもせ  
ぬは俗にムツツリ也。

馳走酒のもてなしに逢  
ひたる也。

雞かあかるみやがて暮の月  
通りののなさに見世たつる秋  
盆しまひ一荷て直きる鮪の魚  
晝寐の癖を直しかねけり  
聳か來てにつさもせず物語  
中國よりの状の吉左右  
朔日の日はさこへやら振舞れ  
一重羽織が失てたつぬる  
きさんしな青葉頃の樅モミ楓カエデ  
山に門ある有明の月  
初あらし畠の人のかけまはり  
水際光る濱の小鱒  
然考蕉然考蕉然考蕉然考蕉

(上卷猿蓑續)



くはらねご(配らねご)  
席を分たざる也。

あながち(強)

阿叟(あそう)芭蕉のこ  
こ也。「翁」の代りに用  
ひたり。

さぶらひ(巾)展墓也。

此山(このやま)石山の  
幻住庵也。

は今宵の遊びはしめより尊卑の席をくはらねご、  
しはく酌てみたれす。人そこく涼みふして、  
野を思ひ山をおもふ。たまくかたりなせる人さ  
へ、さらに人を興せしめんごにあらねは、あなか  
ちに辯のたくみをもこめす。唯、萍の水にしたか  
ひ、水の魚をすましむるたごへにそ侍りける。阿  
叟は深川の草庵に四年の春秋をかさねて、ここし  
は、みな月さつきのあはひをわたりて、伊賀の山  
中に父母の古墳をさぶらひ、洛の嵯峨山に旅寐し  
て加茂、祇園の涼みにもたたよはす。かくてや此  
山に秋を待れけんご思ふに、さすか湖水の納涼も  
わすれかたくて、また三四里の暑を凌て、爰に草

(上巻養猿續)

菅沼氏(すがぬまうじ)  
曲翠也。

莊子に「君子交淡如  
水」

うかゞひ(覗)

古さご(故郷)伊賀の上  
野也。

湖(には)琵琶湖は一に  
鳩の湖といへり。

鞋の駕をここむ。今宵は菅沼氏をあるしこして僧  
あり、俗あり、俗にして僧に似たるものあり。そ  
の交のあはきものは、砂川の岸に小松をひたせる  
か如し。深からねはすこからす、かつ味なうして  
人にあかる、なし。幾年なつかしかりし人々の  
さしむきて、わする、に似たれご、おのつからよ  
ろこへる色、人の顔にうかひて、おほえす雞鳴て  
月もかたふきけるや。まして魂祭る頃は、阿叟も古  
さごの方へごころさし申されしを、支考は伊勢  
の方に住ごころ求て、時雨の頃はむかへんなごも  
おもふ也。しからは湖の水鳥のやかて、はらく  
に立別れて、いつか此あそひにおなしからん。去

(上巻養猿續)

興宴(きやうえん)

いつそ(何時ぞ)ほご  
(程)  
革籠(かはご)反故(はご  
うご)

年の今宵は夢のこごく、明年はいまたきたらす。  
今宵の興宴何そあからさまならん。そそろに酔て  
ねふるものあらは、罰盃の數に水をのまさんご、  
たはふれあひぬ。

夏の夜や崩れて明し冷し物芭蕉  
露ははらり蓮の椽先曲翠  
鶯はいつそのほごに音を入れて臥高  
古き革籠に反故おしこむ惟然  
月かけの雪も近よる雲の色支考  
しまうて錢を分る駕昇芭蕉  
猪を狩場の外へ追にかし  
山から石に名を書て出す高翠

(上巻養猿續)

面桶(めんづ)飯を一人  
づつ分る椽物(わけもの)  
也。天文志に「高飛而定  
天氣」

平畦(ひらあぜ)

馬引(うまひき)道中の  
馬宿のさま也(婆心録)

飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌然  
鳶て工夫をしたる照降考  
おれか事歌によまる、橋の番蕉  
持佛の顔に夕日さし込翠  
平畦に菜を蒔たてしたはこ跡考  
秋風わたる門の居風呂然  
馬引て賑ひ初る月の影高  
尾張てつきしもごの名になる蕉  
餅好のこごしの花にあらはれて翠  
正月ものの襟もよこさす高  
春風に普請のつもりいたす也然  
藪から村へぬけるうら道考

(上巻養猿續)

狭箱(はさみはこ)

矢木(やき)大和の地名。  
際(きは)晦日前を俗に際(さいふ)。(標註)

あづく(預)

表一箇(おもてひごころ)疊の表也。箇はコレと訓む。

喰かねぬ塔も舅も口きいて  
何その時は山伏になる  
笹つみを棒につけたる狭箱  
蕨こははる卯月野の末  
相宿さあさ先にたつ矢木の町  
際の日和に雪の氣遣ひ  
呑ころろ手をせぬ酒の引はなし  
着かへの分を舟へあつくる  
封付し文箱來たる月の暮  
ぞろくありく盆の上蔦衆  
虫籠釣四條の角の川原町  
高瀬をあくる表一箇

蕉 翠 高 蕉 考 然 翠 高 蕉 考 然 翠

(上巻袋猿續)

さん(鈍)鐘のひびきの鈍く聞ゆる也。

今の間に鐘を見かくす橋のうへ  
大きな鐘のさんに聞ゆる  
盛なる花にも扉トビラおしよせて  
腰かけ積し藤棚の下

高 然 考 高

(上巻袋猿續)



續猿蓑集卷之下

春之部

花櫻

温石のあかるる夜半や初さくら露  
 寐時分に又みん月か初さくら其  
 顔に似ぬ發句も出よ初櫻芭蕉角  
 近道や木の股くくる花の山洞木  
 角いれし人をかしらや花の友丈草  
 花散て竹見る軒のやすさ哉酒堂  
 富貴なる酒屋にあそひて、文君か爪音も酔のまき  
 れに、思ひ出らるるに

(下卷猿蓑續)

あかる(倦る)厭はしき也。  
 古歌に「見つくして寐むすればさくら花月のおもてにあらはる哉」(注解)

文君(ぶんくん)卓文君也。司馬相如の妻、相如その家に宿り琴を以て挑み、携へて家出し酒酔をひらく。史記に見

窺はし(か、はじ)人  
 はかくうか、はじの意也。

蒟蒻(こんやく)近江  
 黒津の里は殊にその名物也。

酒部屋に琴の音せよ窓のはな  
 賭にして降出されけりさくら狩支  
 人の氣もかく窺はしはつさくら沾  
 曇る日や野中の花の北面猿雖  
 七ツより花見におこる女中哉陽和  
 見るさころおもふ所や初さくら乙州  
 咲花をむつかしけなる老木哉木節  
 我庭や木ふり見直すはつ櫻沾荷  
 二の膳やさくら吹込鯛の鼻子珊  
 蓑虫の出方にひらくさくら哉卓袋  
 田家  
 蒟蒻の名物さはん山さくら李里  
 咲かかる花や飯米五十石桃首

(下卷猿蓑續)

置床(おきご)持ち  
歩きの出来るかざり床  
也。

奈良茶(ならちや)茶飯  
に小豆、粟を炊きませ  
る也。

濡椽(ぬれえん)敷居の  
外の廂なき椽側也。

山門に花ものものし木のふさり一  
なかれ木の根やあらはるる花の瀧如雪  
花笠を着せて似合ん人は誰其角  
はれやかに置床直す花の春少年  
ぬり直す壁のしめりや軒の花卓袋  
一日は花見のあてや旦那寺沾圃  
八重さくら京にもうつる奈良茶哉同  
若菜  
濡椽や薺こぼる、土なから嵐雪  
梟フクロウの鳴止む岨の若菜かな曲翠  
夕波の船に聞ゆる薺かな孤屋  
一株の牡丹は寒き若菜かな尾頭

(下巻養猿續)

五元集に「宰府奉納しこ  
あり野老賣(やろうり)  
碓(からうす)

梅の根際までその枝を  
折りに行きける下駄の  
跡を見たる也。

梅附柳

春もややけしきまごのふ月ミ梅芭蕉  
衣更着や大黒棚も梅の花野水  
守梅の遊ひ業なり野老賣其角  
里坊に碓きくやうめの花昌房  
投入や梅の相手は落のたう良品  
病僧の庭はく梅のさかり哉曾良  
あたらしき翠簾また寒し梅の花万乎  
薄雪や梅の際また下駄の跡魚日  
しら梅やたしかな家もなきあたり千川  
寐所や梅の匂ひをたて籠ん大舟  
天神の社に詣て

(下巻養猿續)

梅は梅、柳は柳にて、  
それど、臙ろなるをい  
へり。

古歌に「鶯の花ふみち  
らす細脛を大長刀にさ  
ふさかけはや」

ながしもこ(流し元)

ほろ、和名抄に鳥の  
わきのしたけ、俗謂保  
呂羽、ほろ、は保呂打  
の略言也。(標註)

親乙鳥の身を窄めて、  
巢の中の子乙鳥をいた  
はる姿也。

西河(にしがう)芳野に  
あり、笈の小文に見ゆ。

身につけし祈るや梅の籬際遊糸  
それくは水の臙のなりや梅柳千那  
時くは水にかちけり川柳意元  
近道をしへちからや古柳由  
青柳のしたれく、れや馬の曲九節  
輪をかけて馬乗通る柳かな巴丈  
鳥附魚  
鶯に長刀かかる承塵かな其角  
鶯や野は堀越の風呂上り史邦  
鶯に手もこ休めんなかしもこ智月  
鶯や柳のうしろ敷の前芭蕉  
瀧壺もひしけし雉子のほろろ哉去來

(下巻養猿續)

春雨や養につまん雉子の聲酒堂  
駒鳥の眼のさやはつす高根哉傘下  
こま鳥の音そ似合しき白銀屋長虹  
燕や田をおりかへす馬のあこ野童  
巢の中や身を細うして親乙鳥少年嵐  
雀子や姉にもらひし雛の櫃槐市  
蠅うちになる、雀の子飼かな河瓢  
行鴨や東風につれての磯をしみ釣帚  
芳野西河の瀧  
鮎の子のこゝろすさまじ瀧の音土芳  
陽炎も共にちらつく小鮎哉圃水  
しら魚の一かたまりや汐たるみ子珊

(下巻養猿續)

白魚のしろき噂もつきぬへし山蜂

深川に遊ひて

四ツ手(よつて)よつて

白魚をふるひ寄せたる四ツ手哉其角

春草

なくりても萌たつ世話や春の草正秀

若草や松に付たき蟻の道此筋

春の野やいつれの草にかふれけん尼羽紅

川淀や泡をやすむる蘆の角猿雖

宵の雨しるや土筆の長みしか闇指

味ひや櫻の花によめかはき車來

茨はら咲添ふものも鬼あさみ荒雀

堤よりころひ落れはすみれかな馬覓

かぶれ(氣觸)漆にかぶるなごのかぶれ也

よめがはき(賣高)嫁茶也

(下巻養猿續)

早蕨(さわらび)

踏跨く土堤の切目や露のたう拙侯

ふみ倒す形に花さく土大根乃龍

早蕨や笠さり山の柱うり正秀

味噌部屋の匂ひに肥る三葉哉夕可

日のかけに猫の爪出す獨活芽哉一桐

蒲公英や葉にはそくはぬ花さかり圃苜

猫戀附胡蝶

我かけや月に猶なく猫の戀探丸

うき戀にたえてや猫の盗喰支考

思ひかねその里たける野猫かな巳百

白日しつか也

こまりても翅は動く胡蝶かな柳梅

芭蕉の句に「葉にそむく椿や花のよそ心」さむと同じ心持にて「たんぼ」の花の葉に似附かざる意也

(下巻養猿續)

衣更着(きさらき)二月の異名也。

鹿は春になればその角落る也。

千刈(せんかり)任吉の御田刈也。

衣更着のかさねや寒き蝶の羽 惟然  
 蝶の舞おつる椿にうたる、な 閣 指  
 風吹に舞の出来たる小蝶かな <sup>テ</sup>重ハ 行  
 晝寐して花にせはしき胡蝶哉 雪 窓  
 春鹿  
 振落し行や廣野の鹿の角 澤 雉  
 春耕  
 妙福の心あてありさくら麻木 節  
 苗札や笠縫をきの宵月夜 此 筋  
 千刈の田をかへす也難波人 一 鷺  
 桃附櫻  
 白桃や雫も落す水の色・桃 隣

(下巻養猿續)

脇踊(わきをざり)

小服綿(こぶくわた)十徳に似たる僧の略衣也 運如上人傳に「小服綿を常に召玉ふ」

歎冬(やまぶき)道灌の歌に「七重八重花はさけさも山吹のみのひさつたになきそかなしき」

金柑はまた盛り也桃の花 介 我  
 伏見かき薬種の上の桃の花 雪 芝  
 梅さくら中をたるます桃の花 水 鷗  
 花さそふ桃や歌舞妓の脇踊 其 角  
 江東の李由か祖父の懐舊の法事に、おのゝ経文  
 題の發句に、彌陀の光明さいふ事を  
 小服綿に光をやさせ玉つはき 角 上  
 穂は枯て臺に花咲椿かな 殘 香  
 取あけて見るや椿のほその穴 洞 水  
 ちり椿あまりもろさに繼て見る 野 坡  
 歎冬附 躑躅藤  
 山吹や垣に干たる衰ひさへ 閣 指

(下巻養猿續)

田家の人に對して

罽(しび)罽(しびまぐ  
る)の膾也。  
より(寄)群り寄るこ  
ぞ。

山吹もちるか祭の罽なます酒堂  
掘おこすつゝしの株や蟻のより雪芝  
藪嚙や穂麥にまゝく藤の花荆口  
春月

山の端をちから顔也春の月 長崎 町

春雨附春雪蛙

物よわき草の座こりや春の雨荆口  
咄さへ調子合けり春の雨乃龍  
春雨や唐丸あかる臺所游刀

主馬(しゆめ)本間氏活  
圃也、大津の能太夫也。

なにかし主馬か、武江の旅店を尋ける時  
春雨や枕くつるゝうたひ本支考

(下巻養猿續)

居る(すわる)石に蛙の  
坐り居る也。

春雨や光りうつろふ鍛冶か槌桃首  
沫雪や雨に追るる春の笠風麥  
行つくや蛙の居る石の直風睡

不盡(ふじ)富士山也。

のほり帆の淡路はなれぬ沙干哉去來  
品川に不盡のかけなき沙干哉 闇 指

雜春

またぎ(跨)

出かはりや哀勸る奉加帳許六  
若草やまたぎ越たる桐の苗風睡  
黒はこの松のそたちや若みこり土芳  
陽炎や巖に腰のかけちから配力  
小米花奈良のはつれや鍛冶か家万乎

(下巻養猿續)

雀かくれ草木の生立をいふ也。(標注)

小室節(こむろぶし)

菟道(えんたう)

螺(にし)海麻「はいのみ」に似たる故、螺肴にも用ふ。(標注)

詩經に「東方未明顛倒衣裳顛之倒之自公召之」

山の井、季吟選に「歳旦は常にかはりたる事多し。鼠をも嫁か君といふ。」  
世阿彌(せあみ)室町時代の名役者、二世観世太夫、名は元清、康正元年歿。  
羽ぶきは羽たゝき也。

聲毎に獨活や野老や市の中 苔  
木の芽たつ雀かくれやぬけ参り 均ミ)水 蘇  
春の日や茶の木の中の小室節 正 秀  
三尺の鯉はぬるみゆ春の池 仙 花  
引鳥の中に交るや田にし取 支 浪  
三月盡  
臙夜を白酒賣の名残かな 支 考  
歳旦  
若水や手にうつくしき薄氷 少年 武 仙  
菟道は年の霞の立所かな 百 歳  
鶯や雜糞過ての里つゝき 尙 白  
蓬萊の具につかひたし螺の貝 圃 荇

(下巻簞猿續)

母方の紋めつらしやきそ始 山 蜂  
詩にいへる衣裳を顛倒すこいふ事を、老父か文に  
書越し侍れは

元日や夜深き衣のうらおもて 千 川  
人も見ぬ春や鏡のうらの梅 芭 蕉  
明る夜のほのかに嬉しよめか君 其 角  
標ユツリハの世阿彌まつりや青かつら 嵐 雪  
萬才や左右にひらいて松の蔭 去 來  
鶯に橘見する羽ぶきかな 土 芳  
初春やよくして過る無調法 風 睡  
冬こし、孫をまうけて  
元日やまた片なりの梅の花 猿 雖

(下巻簞猿續)

齒朶(した)

中原康富記に「文安六年五月若狹白比丘尼上洛臥雲日件に百歳の老尼若狹より洛に入る洛中の者争観る」  
若夷(わかえびす)元日その札を賣りあるく者也。

かつら(鬘)

子供には先惣領や藏ひらき  
背たらおふ物を見せはや花の春  
齒朶の葉に見よ包尾の鯛のそり  
鮭の簀の寒氣をほこく初日哉  
初春や年は若狹の白比丘尼  
枇杷の葉のなほ慥也初霞  
世の業や髪はあれこも若夷  
ぬれ色や大かはらけの初日影  
元日や置こころなき猫の五器  
我宿はかつらに鏡するにけり  
搗栗や餅にやはらく其しめり  
虫干のその日に似たり藏ひらき  
圃 沾 是 竹 任 山 斜 前 左 耕 野 童 雫  
角 圃 樂 戸 行 蜂 嶺 川 柳 雪 童 雫

三四六

(下巻簀娘續)

夏之部

郭公

曉の霜をさそふや子規其角  
時鳥なくや湖水のさ濁り丈草  
しら濱や何を木蔭に時鳥會良  
子規なかなぬ夜白し朝熊山支考  
鳴瀧の名にやせりあふ子規如雪  
燕の居なしむ空やほこきす蘆本  
淀よりも瀬田に鳴けかし郭公  
此句は石山の麓にて、巡禮の吟して通りけるや。  
郭公かさいの森や中やこり沾圃  
三四七

(下巻簀娘續)

朝熊山(あさまやま)伊勢。

鳴瀧(なるたき)山城。

僧聖徒の詩に「燕子辭レ巢始到レ家杜鵑啼處在ニ天涯」(注解)

かさい(葛西)武藏。



橙(たいぐ)

年功(ねんこう)柿の古木の功者に若葉するをいふ。

山もえ(山燃)山焼の火也。  
冷汁(ひやじる)寒冷(にひやし)のこと。

木附草花

橙や日にこかれたる夏木立  
闇指 里くの姿かはりぬ夏木立  
野萩

園中二句

此中の古木はいつれ柿の花  
此筋 年功の老木も柿の若葉哉  
千川 姫百合や上よりさかる蜘蛛の糸  
素龍

題「山家之百合」

白雲や垣根をわたる百合の花  
支考 山もえにのかれて咲や杜若  
尾頭 冷汁はひえすましたり杜若  
沾圃 手のさく水際うれしかきつはた  
イカ 宇多都

ちみ(縮)藻の花の風に吹きちめられ、一ト固りになりて咲ける也。

木がらし、風國撰に「瓜の泥」  
姫瓜(ひめうり)花と葉と共二に小さし質の大さ二寸程。

はせを庵の即興

夏菊や茄子の花は先へさく拙侯  
晝顔や日はくもれさも花盛り沾圃  
夕顔や酔て顔出す窓の穴芭蕉  
夕顔や裸て起て夜半過嵐人  
藻の花をちみ寄たる入江哉残香  
蘭の花にひたく水の濁りかな此筋  
蓮の葉やこころもさなき水離れ白雪  
客あるし共に蓮の蠅おはん良品  
瓜  
朝露によこれて涼し瓜の土芭蕉  
姫瓜や袖に入ても重からす至曉

京入や去來抄に卯七  
日先師遷化の翌年墓  
參して歸る時の作也  
しかるにこゝに入集し  
あるはいかにそや  
あり

まで(眞手)まじめなる  
顔也

そるゝ螢の煙をさけ  
て、よそにそれて飛ぶ  
也

牡丹

龜相なる膳は出されぬ牡丹哉 風 弦

早苗

京入や鳥羽の田植の歸る中 ナガサキ 卯 七

早乙女に結んでやらん笠の紐 闇 指

ふさる身の植おくれたる早苗哉 魚 日

田植うたまたなる顔の諷ひ出し 重 行

一田つゝ行めぐりてや水のおこ 北 枝

里の子か燕握る早苗かな 支 考

螢

蚊遣り火の煙にそるゝ螢かな 許 六

三日月に草のほたるは明にけり 野 萩

(下巻箋猿續)

無花果(いちじゆく)

納涼

すすしさを竹握り行藪つたひ 半 殘

無花果や廣葉にむかふ夕涼 惟 然

深川の庵に宿して

はせを葉や風なきうちの朝涼み 史 邦

涼しさを駕籠を出ての繩手道 重 翠

石ふしや裏門明て夕すすみ ナカサキ 杜 年

すゝしさを牛の尾振て川の中 万 乎

漫興三句

腰かけて中に涼しき階子かな 酒 堂

涼しさを椽より足をふらさける 支 考

生酔をねちすくめたる涼かな 雪 芝

(下巻箋猿續)

ねぢ(振)すくめ(鍊)

石ふし(鮎)和名抄に  
「鮎性沉伏而在石間」  
者

默禮(もくれい)石の上  
なれば危く困る也。

かたはみ(酢漿草)

いさめ(諫)寢冷を注意  
されたる也。

はせを翁を茅屋にまねきて

涼風に出来した壁のこわれ哉 游  
いそかしき中をぬけたる涼み哉 同  
立ありく人にまきれて涼み哉 去  
默禮にこまる涼みや石の上 正 秀  
職人の帷子着たる夕すゝみ 土 芳  
涼しさや一重羽織の風たより 我 眉  
夜涼やむかひの見世は月かさす 里 圃  
盛夏  
かたはみや照かたまりし庭の隅 野 荻  
李盛る見世のほこりの暑哉 万 乎  
藪醫者のいさめ申されしに答へ侍る

(下巻箋猿續)

棒つかひ(棍手)棒を取  
つて敵に當る武技也。

ざりかへり(取返す)晝  
は暑氣に惱みしを、夜  
は月の涼味に取返す意  
也。

粘(のり)糊也。

庫裏(くり)

實もこは請て寐冷の暑さ哉 正 秀  
取葺の内のあつさや棒つかひ 乙 州  
煤さかる日盛あつし臺所 怒 風  
茨ゆふ垣もしまらぬ暑さかな 尾 覺  
草の戸や暑を月にざりかへす 我 峰  
暑き日や扇をかさす手のほそり 印 苔  
積あけて暑さいやます疊かな 卓 袋  
粘になる虻も夜のあつさかな 里 東  
立寄れはむつみ鍛冶屋の暑哉 沾 圃  
竹の子  
筍にぬはるゝ岸の崩かな 可 誠  
若竹や烟のいつる庫裏の窓 曲 翠

(下巻箋猿續)

徴(つゆ)  
 爲辨抄、支考著に「故  
 翁のもの語に此ほさ白  
 氏文集を見て、老鶯こ  
 病蠶さいへるこの詞の  
 おもしろけは、句作を  
 なせる事見ゆ。  
 さし合(さしあはせ)相  
 愈也、最合にさしたる  
 也。

中戻り(ちうもどり)夕  
 立に逢ひて途中で戻れ  
 は、蟬の聲と共に夕立  
 は上りたる様也。

五月雨附夕立

三五四

白鷺や青くもならず徴の中テハ不玉  
 さみたれや蠶煩ふ桑の畑芭蕉  
 五月雨や踵ヒヂスよこれぬ磯つたひ沾圃  
 夕立にさし合けり日傘拙侯  
 白雨や蓮の葉たたく池の蘆苔蘇  
 夕立やちらしかけたる竹の皮曉鳥  
 ゆふ立に傘かる家やま一町圃水  
 蟬  
 白雨や中戻りして蟬の聲正秀  
 きつこ来て鳴て去けり蟬の聲胡故  
 森の蟬涼しき聲やあつき聲乙州

(下巻養猿續)

ごぼし(芝)

くべて 麥のからを焚  
 きくべる也。

酒はやし(酒帘)

せはき(狹)

蟬なくや布織る窓の暮時分曉鳥  
 かつを  
 籠の目や潮こほる、はつ鯉葉拾  
 雑夏

晝寐して手の動止むうちは哉杉風  
 虫のくふ夏菜ごぼしや寺の畑荆イセ口  
 夏瘦もねかひの中のひこつなりイセ如セ真

(下巻養猿續)

川狩にいて、  
 じか焼や麥からくへて柳鮪文鳥  
 異草に我かちかほや園の紫蘇蔦雫  
 夕闇は螢もしるや酒はやし水鷗  
 せはきころに、老母をやしなひて

三五五

笊(いがき)飯糰にも作  
る。「ざる」の事也。

澤瀉(おもたか)

淵明の傳に「夏日高臥  
北窓之下」

簾(たかむしろ)

魚あふる幸もあれ遊うちは馬  
 梅むきや笊かたむく日の面重  
 澤瀉や道付かへる雨のあこ野  
 蝸牛角引藤のそよき哉水野  
 晋の淵明をうらやむ 鷗童翠  
 窓形に晝寐の臺や簾芭蕉  
 粘こはな帷子かふる晝寐哉  
 貧僧のくるしみ、冬の寒さはふせくよすかなきに、  
 夏日の納涼は、扇一本にして世上に交る。  
 帷子のねかひはやすし錢五百支考  
 然蕉

(下卷箋猿續)

こゝに支考が師芭蕉の  
句に私評を加へたるを  
以て、續猿箋は支考の  
私撰なりこの説あり。

圓位(えんゐ)西行也。  
初め大實坊圓位といへ

老杜の詩は「稻稷空雲  
水川平對石門」の誤  
ならん。(標註)

秋之部

名月  
 名月に麓の霧や田のくもり芭蕉  
 名月の花かみ見えて綿島同  
 ここしは伊賀の山中にして、名月の夜この二句を  
 なし出して、いつれか是非ならんこ侍り  
 しに、此間わかつへからず。月を待つ高根の雲は  
 はれにけりこころあるへき初時雨かな。こ圓位法  
 師のたまり申されし麓は、霧横たはり水なかれて、  
 平田渺々曇りたるは、老杜か唯雲水のみなりこ  
 いへるにもかなへるなるへし。その次の綿はだけ

(下卷箋猿續)

古今集に「秋の來て月の桂の實やはなる光りを花さちらすばかりに」

東坡の詩に「春宵一刻直千金、花有清香月有陰」

田養(たみの)攝津北濱邊の地名也。

は、言葉龜にして心はなやかなり。いは、今のこのむ所の一筋に便あらん。月のかつらのみやはなるひかりを花さちらす斗に。こおもひやりたれば、花に清香あり月に陰ありて、是も詩歌の間をもれす。しからは前は寂寞をむねとし、後は風興をもつはらにす。吾こころ何そ是非をはかる事をなさん。たた後の人なほあるへし。

支考評

(下巻養猿續)

名月の海より冷る田養かな酒堂  
名月や西にかゝれは蚊帳の月如行  
ものくの心根こはん月見哉露沾

いさかひ(關評)

更科(さらしな)信濃。蕎麥ご月の名所也。

遠見(さほみ)斥候「ものみ」の松也。

締(ひらた)小舟の薄くして長さもの也。

ふたつあらはいさかひやせん今日の月智月  
名月や長屋のかけを人の行間指  
名月や更科よりのごまり客涼葉  
名月や灰吹捨るかけもなし不玉  
中切の梨に氣のつく月見哉配力  
名月や草のくらみに白き花左柳  
名月や遠見の松に人もなし圃水  
拜む氣もなくて尊や今日の月山蜂  
名月や寐ぬ所には門しめす風國  
名月や四五人乗し締舟需笑  
老の身は今宵の月も内てみん重友  
名月にかくれし星の哀也泥芹

(下巻養猿續)

庵地(いほち)庵を結ぶ  
によき土地柄の意也。

青手柴(あをてしは)

場(には)

舟引(ふなひき)淀川の  
曳舟也。

伊勢の山田にありて、かりの庵をおもひ立けるに

二見まで庵地尋る月見哉支考  
 けし蒔き畑迄行ん月見哉空牙  
 柿の名の五助と共に月見哉如眞  
 山鳥のちつとも寐ぬや峰の月宗比  
 名月や里の匂ひの青手柴木枝  
 場に居て月見なからや庭機利合  
 名月や聲かしましき女中方丹楓  
 名月や何もひろはす夜の道野萩  
 飛入の客に手をうつ月見哉正秀  
 淀川のほごりに日を暮して  
 舟引の道かたよけて月見哉丈草

(下巻養猿續)

三老女(さんらうぢよ)  
諸曲の中の姨捨、檜垣、  
關寺の三也。作者泊圃  
は寶生左太夫也。

五本松(ごほんまつ)深  
川芭蕉庵の近傍也。

待宵の月に床しや定飛脚景桃  
 家に三老女いふ事あり。亡父將監か秘してつた  
 へ侍しをおもひ出て

姨捨を闇にのほるやけふの月沾圃  
 露置て月入あみや塀の屋根馬寛  
 蔦かつら月またたらぬ梢かな里東  
 月影や海の音聞長廊下牧童  
 深川の末、五本松いふ所に船をさして  
 川上も此川下や月の友芭蕉  
 十六夜はわつかに闇のはしめ哉同  
 いさよひは闇の間もなし蕎麥の花猿雖  
 七夕

(下巻養猿續)

薰姫(たきものひめ)の  
袖中抄に七夕七姫の一  
也。

中(ちゆう)虚空也。

ねびぬ(調)年のたけた  
るを云ふ。

鶴坂(うさか)越中婦負  
郡鶴坂の社にて、女の  
男持たる敷を杖にて打  
也。

弓固(ゆみかため)

つまね花(鳳仙花)

枕草紙に「かまつかの  
花らうたけ也。雁の來  
る花さ、もじにはかき  
たる」

更行や水田の上の天の川惟然  
星合を見置て語れ朝鳥涼葉  
船形りの雲しはらくや星の影東潮  
たなはたをいかなる神にいはふへき沾圃  
朝風や薰姫の團もち乙州圃  
立秋  
栗ぬかや庭にかたよる今朝の秋露川  
秋立や中に吹るる雲の峰左次  
秋草  
朝露の花透通す桔梗哉柳梅  
細工にもならぬ桔梗のつほみ哉隨友  
女郎花ねひぬ馬骨の姿かな濁子

(下巻養猿續)

贈芭蕉庵

をみなへし鶴坂の杖にた、かれな馬  
一筋は花野に近し畠道鳥栗  
弓固さる頃なれや藤はかま支浪  
百合は過芙蓉を語る命哉風麥  
さよ姫のなまりも床しつまね花史邦  
枯のほる葉は物うしや雞頭花万乎  
雞頭や雁の來る時猶赤し芭蕉  
雞頭のちる事しらぬ日數哉至曉  
折くや雨戸にさはる萩の聲雪芝  
葛の葉や残らす動く秋の風荷今  
山人の畫寐をしはれ葛かつら桃妖

(下巻養猿續)



長(たけ)

あら野に「菊の宴」  
ありて同じく其角の句  
也。書損を正して再入  
にや。

悦目抄に「りんたうの  
花を手向るきほうしの  
けりむ聲はたふさかり  
けり」  
竈馬(こほろき)

形(なり)

三六四

風毎に長くらへけり 蔦かつら 杉 下  
 朝顔  
 朝顔の苔かそへん 薄月夜 田上尼  
 葬の這てしたる、柳かな 闇 指  
 水もあり朝顔たもて 錫の舟 風 麥  
 朝顔にしほれし人や 髪帽子 其 角  
 虫附鳥  
 きほうしの傍に 經よむいこまかな 女 可 南  
 竈馬や 顔に 飛つく 袋 棚 北 枝  
 火の消て 胴にまよふか 虫の聲 正 秀  
 秋の夜や 夢さ 躰さきりくす 水 鷗  
 簀虫や 形に 似合し 月の影 杜 若

(下巻簀猿續)

元版「蟪蛄や」  
傍に「か」加筆あり。

ぬけがら(脱殻)

からめかし 風のふく  
音にて「くわらめかし」  
の意か(標註)

三六五

蜻蛉や 何の味ある 竿の先 探 丸  
 蟪蛄の 腹を冷すか 石の上 蔦 雫  
 蓮の 實に軽さくらへん 蟬の空 示 峰  
 ぬけがらに 並ひて 死る 秋の 蟬 丈 草  
 雁かねに ゆらつく 浦の 筥屋 哉 馬 竟 草  
 鶺鴒や 走り 失たる 白川 原 氷 固 竟 草  
 粟の 穂を見上る 時や 鳴 鶺 支 考 固 竟 草  
 老の名の ありこもしらて 四十 雀 芭 蕉  
 秋風  
 秋風や 二番 烟草の ねさせ 時 游 刀  
 雀子の 髭も 黒むや 秋の 風 式 之  
 何なりこから めかし 行 秋の 風 支 考

(下巻簀猿續)

しなへ(撓)  
ふんはる(踏張)強き  
野分に向つてふみ耐へ  
る也。

稻の殿(いねのこの)稻  
妻也。

便(たより)こころにて  
也。

松の葉や細きにも似す秋の聲 風 國  
おのつから草のしなへを野分哉 圃 燕  
ふんはるや野分にむかふ柱賣 九 節  
あれくゝて末は海行野分哉 猿 雖

稻妻

獨居て留守ものすこし稻の殿 少年 東

稻妻や雲にへりこる海の上 宗 比

明ほのや稻妻戻る雲の端 土 芳

いなつまや闇の方行五位の聲 芭 蕉

木實附菌

團栗の落て飛けり石ほこけ 爲 有

炭焼に溢柿たのむ便かな 立 虎

(下巻養猿續)

つぶく(圓々)

阿叟(あそう)師芭蕉の  
こと。

元版「いせの斗從に山  
家をさはれてこして  
墨消しあり。蕎麥はま  
たの句の前書を誤つ  
て記入したる爲めか。

秋空や日和くるはす柿の色 酒 堂  
つぶくみ帚をもる、榎の實哉 重 翠  
初茸や鹽にも漬す一盛り 沾 圃

伊賀の山中に、阿叟の閑居を訪らひて

松茸や都に近き山の形 惟 然

まつ茸やしらぬ木の葉のへはりつく 芭 蕉

楓

後屋の塀にすれたり村紅葉 北 鯤

鹿

尻すほに夜明の鹿や風の音 風 睡

寐かへりに鹿おころかす鳴子哉 一 酌

農業

(下巻養猿續)

起しせし畑を起したる小作人也。

さまたける(妨)

すんざ(寸胴)

樽次(たるつぐ)江戸大塚の大地黄坊といひ池上の大蛇丸底深酒戦せし大上戸也(標註)

翁草(おきなくさ)菊の異名。

むかはき(行膝)袴の前を被ふもの、毛皮にて製る。

いが(毬)

起しせし人は逃けり蕎麥の花車庸  
木の下に狸出迎ふ穂懸哉買山  
さまたける道にもくまし疇の稻如雪

伊勢の斗從に山家を訪れて

蕎麥はまた花てもてなす山路哉芭蕉  
早稻刈て落つき顔や小百姓乃龍  
山雀のまこやらに鳴霜の稻斗從  
居りよさに河原鷗來る小菜畑支考  
一霜の寒さや芋のすんざ刈同  
肌寒き始にあかし蕎麥の莖惟然  
百なりていくらかものそ唐辛子木節

大師河原に遊ひて、樽次といふものの孫にあひて

(下巻續猿)

そのつるや西瓜上戸の花の種沾圃

菊

翁草二百十日も恙なし葛零  
ゑほし子やなま白菊の玉牡丹濁子  
養木綿の零に寒し菊の花支考  
題書屏

むかはきやかかる山路の菊の露兀峰  
借りかけし庵の噂や今日の菊丈草  
暮秋

廣澤や背負て歸る秋の暮野水  
行秋を鼓弓の糸の恨かな乙州  
行秋や手をひろけたる栗のいか芭蕉

(下巻續猿)

鰻(はぜ)沙魚也。

雜秋

主馬(しゆめ)近江の能大夫にて、俳號丹野也。  
莊子に「接(トッテ)觸(ツク)體(テ)枕(シ)而臥(ス)」。枕而

五六十海老つひやして鰻一つ之道  
粟からの小家作らん松の中團友  
あら鷹の壁にちかつく夜寒哉 畦止  
残る蚊や忘れ時出る秋の雨 四友  
身ふるひに露のこほる 靱哉 荻子  
更る夜や稻こく家の笑ひ聲 万乎  
柿の葉に焼味 噌盛らん 薄箸 桑門 波  
本馬主馬の宅に骸骨共の笛、鼓をかまへて、能する  
所を畫て、舞臺の壁にかけたり。誠に生前のたは  
ふれ、なまは此あそひにこそならんや。かの觸體  
を枕として終に夢うつつをわかたさるも、只この

(下巻養猿續)

薄(すゝき)

稻妻や顔の所か薄の穂芭蕉

生前をしめさるるものなり。

冬之部

時雨附霜

この頃の垣の結目や初時雨 野坡  
しくれねはまた松風の只おかす 北枝  
けふ斗人もさしよれ初しくれ 芭蕉  
一時雨又くつつをるる日影哉 露沾  
初時雨小鍋の芋の煮加減 馬寛  
平押に五反田くもる時雨哉 野明

(下巻養猿續)

約塞、許六撰に「元祿壬申冬十月三日許六亭興行」さ証書あり。くつつをる、(顔)

平押(ひらおし)